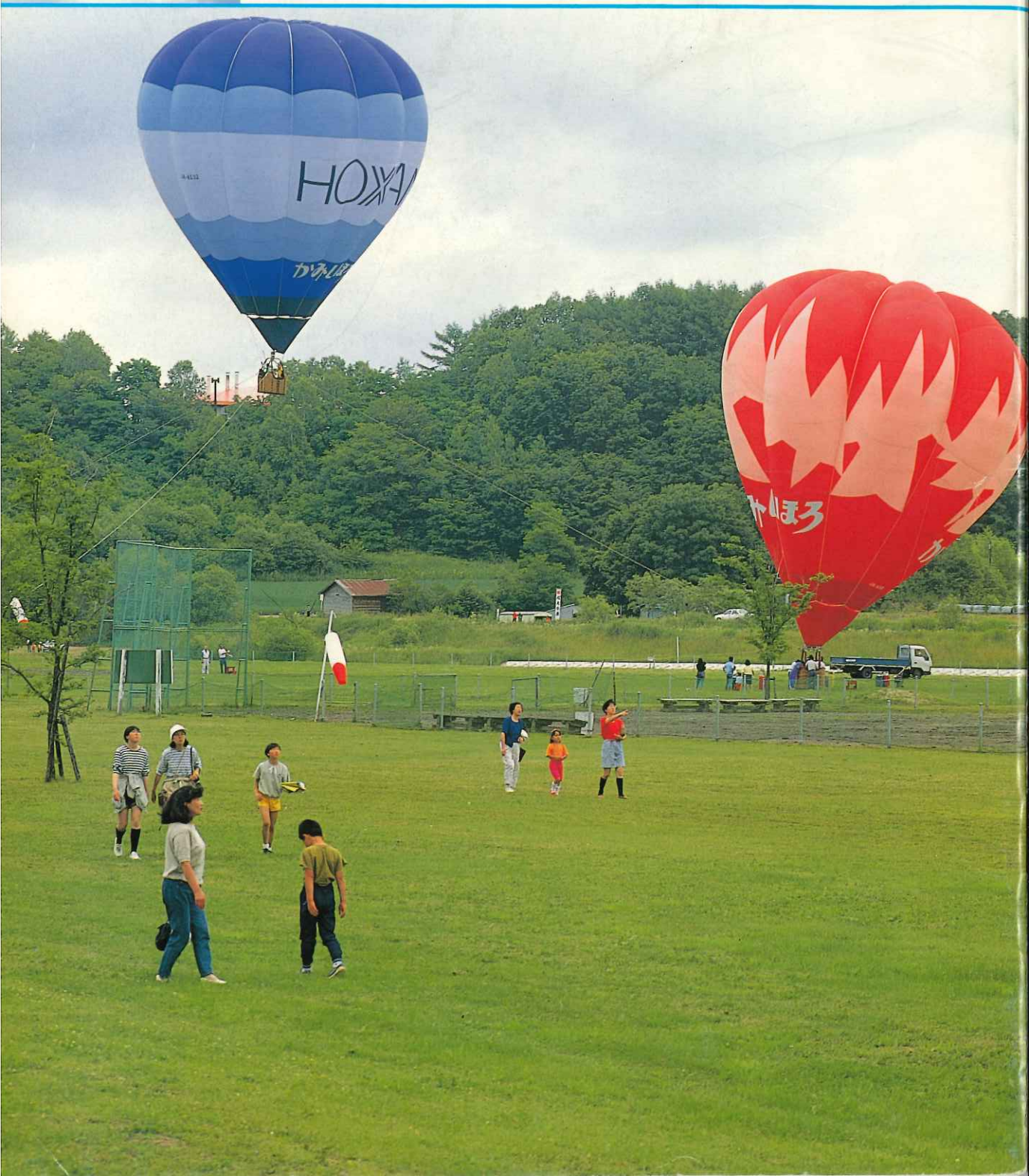


[De POLA] 地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

# でぽら

No. 1

'91秋冬号





## 北海道ちほく高原鉄道

北海道の鉄道の多くが姿を消した中で、唯一「ふるさと銀河線」という名前のオニセクターとして生き残った。国鉄赤字の「長大四線」の一つといわれた路線だけに経営は苦しいが、沿線町村の住民活動は大変活発なところである。

北見は北の玄関口にふさわしく街並みも整備されパーミントのまちとして活気を呈している。

トウモロコシの三万坪迷路が話題の本別。「しばれフェスティバル」の陸別。「人間はんば」で力持ちのまちとして知られる置戸は、木工・オケクラフトでも有名。J根室本線に接続する池田町から北見までの140km。北海道らしい雄大な風景の中を快適に走る。

## ス線・南リアス線



石田野畑駅



横浜博で活躍したレトロ車両(緑、茶の2種)。

# いま、ローカル線が面白い！

●フォト・アルバム

もくじ

●フォト・アルバム

いま、ローカル線が面白い——2

●特集1/俺たちカントリー派。ふるさとづくりのへソになる！——5

大石田百姓保存会/クラフトマンたちのおもちゃの里づくり/農作業請負います/自然の中で自分らしく(酪農家へ嫁いだ女性たち)、足尾の復興をめざす

●自然・大地からの提案——17

トメさんのめんこいダンチョウ(中村玲子)——17  
牛と人間の共和国をめざして(太田實)——20

●エッセイ 遊び人をつくれ/山崎充——22

●特集2/ふるさとへのメッセージ

都会と農村のいい関係をめざして——24

生協10年の取り組み/山村留学/早稲田大学探検部他

●いま、ローカル線が面白い(解説)——32

●INFORMATION——34

EVENT: 味覚の秋まつり/郷土芸能祭典

## 『でぼら』(DePOLA)発行に寄せて 全国過疎地域活性化連盟

「でぼら」(DePOLA)とは、Depopulated Local Authorities (人口が少ない地域)、つまり過疎地域を意味しています。

わが国には過疎市町村が1,165団体(34市、751町、380村)あり、全市町村の36.0%にも達しています。人口が減ると教育文化、福祉、産業経済などあらゆるものに影響し、地域の活力を失ってきます。

一方、東京をはじめとする都市は人口の過密化で、人々は狭い居住空間や騒音、交通ラッシュというさまざまな弊害の中で暮らしています。

私たちは戦後の高度経済時代を経てきて、失ってきたもの、見落としてきたものがいかに重要であったかによく気づきはじめました。貴重な自然環境と農産物の供給地である地方、日本の伝統や文化、風土を伝承してきた地方——そこは都会に住む人々にとってもかけがえのない“ふるさと”です。そのふるさとが元気いっぱいでない都市に暮らす人も元気ではいられなくなります。

地方と都市、もっと理解し協力し合っ、お互いに発展していく方法はないのでしょうか。そのための情報交換と交流誌が「でぼら」です。とくに、明日を担っていく若い人たちとのネットワークを期待しています。



車窓からは牛馬の放牧の姿やじゃがいも・タマネギ畑など変化に豊かな風景が展開する。



鉄路脇にはフキ・ワラビ・キノコなどの山菜もたわわ。大自然の恵みは北海道ならではの。



白い木の器で知られるオケクラフト・置戸町にある鹿ノ子(ダム)は植物の豊富な観光の穴場。



魚介類のメッカとして知られる三陸海岸を走るこの鉄道は、風景よし、味覚よしで、途中下車を楽しみながらのんびり旅する人にぜひおすすめ。横浜博の時登場したクラシックカーに乗ると気分は一層リッチである。各地の魚市場にも足を運んでみよう。宮古(釜石)途中JTB線乗り換え) 107.6 km。

## 三陸鉄道(北リア)



宮沢賢治「銀河鉄道の夜」にゆかりのお



## 北近畿タンゴ鉄道(宮津・宮福線)

由良、大江山、天橋立など百人一首にも数多く登場する歴史を持ち、名所や温泉、ちりめん、紙漉き等の伝統工芸品など観光地としての魅力もいっばいの地域である。この路線にオミセクター転換とともに導入されたのがハイデッカー車、「タンゴ・エクスプローラー」と近代的な駅舎の数々。この列車に乗るだけで丹後路への旅はとつとも楽しくなり、駅舎はどこもユニークで躍動感にあふれている。宮津線は西舞鶴〜豊岡83・6 km、宮福線は福知山〜宮津30・4 km。



（裏面）

日本三大名勝といわれる天橋立のファンタジックな夜景。駅舎はリニューアルでイメージを一新、近代的な日本風建物。

北近畿タンゴ鉄道の花形、タンゴエクスプローラー。大きく開かれた窓とゆったりした椅子は、座っているだけでも楽しい。

●特集1

# 俺たち、

# カントリー

# 派。

## ふるさとJUNVSの へんになるー!



「いま百姓という暗いべ。パアーツと明るく楽しくせにゃあ」と、じいちゃん、ばあちゃん、若者、子供たちにも積極的に呼びかけて、ログハウスまで建ててしまった大石田百姓保存会の人たち、祭りを町の一大イベントに定着させた青年たち。「野良仕事の便利屋」をはじめた大工の若者たち。——その顔はいきいきとしてまぶしいほどだ。

そして、都会から田舎での生活を積極的に選んだクラフトマンや酪農家へ嫁いだ女性たち。その表情はおだやかで、私たちに「人間らしく生きるってこういうことなんだな」としみじみ感じさせてくれる。

カントリーライフを楽しむ、前向きに生きている人たちを各地に取材した。





# 俺らあのログへ、どりいむ 土理偉夢仲間、 いごでもいごや 大石田百姓保存会(山形県)

こんなありさまでは百姓保存会の面々も意気消沈しているのではないかしら、と私は心配していたが、大石田駅へ迎えにきてくれた百姓保存会の代表海藤平太さんの笑顔は底抜けに明るい。

「子どもたちはソフトボール大会で勝ったから焼き肉パーティしよう」と盛り上がりつつ、野菜の宅配便も送らな

いけんし、頭の中はこんがらがるといふとニコニコして言う。着いた海藤宅のガレージでは、平太さんの妻晃子さんと田中正信さんが、トマト・ナス・キュウリ・トウモロコシなどの野菜セットを午後の便で発送する準備に大忙

しである。さっそくスナックを撮ろうとしたら、わがコンパクトカメラは電池切れ。ちょうどスイカを積んで来合

わせた星川松雄さんのトラックに便乗する。近くの食料雑貨店で電池を詰め、その店から発送するスイカの段ボール箱をおろしているところに、田中さん

が野菜セットを運んできた。「もう発送飽きたよ。毎日だもんな。昨日は30箱送ったよ」と田中さん。

「自分が作って売る物を送るのはまた別だ」と松雄さん。

田中さんの30箱とは、松雄さんの指導で初めて作って大成したスイカを首都圏の友人知人に無料プレゼントしたものである。田中さんはスーパー

とした感じの人で、「もう飽きた」などと言うものだから、私はてっきり成り金百姓の道楽息子かと思つたのだが、大間違ひ。百姓保存会と出会うまでは、埼玉県岩槻市の小学校の教師であつた。

一昨年夏のこと、田中正信さんは山形県天童市にある妻の実家へ遊びにきた折に、偶然大石田町を通りかかつて「百姓保存会直販所」の看板を見た。

百姓保存会というネーミングに胸を衝かれた。そこにこめられた誇りと祈りを停めて、「百姓保存会ってなんだ」と居合せた平太さんたちと三〇分ほど話をした。登校拒否児に深く関わって

いた田中さんは、田舎ぐらしの中での教育実践活動を志し、まず自分が百姓

になるうと考えていた。平太さんは「稲刈りが終ればじつくり話ができる、その頃こい」と言った。田中さんはきた。

平太さんたちは「こいつ、本気だな」と思った。「凄雪の中で暮せるかな

その頃にきてみるや」と言った。2月、田中さんは看護婦の妻・富美子さんと中学一年生になる心平くん、4歳の孔平くんと一緒にまたきた。これはもう本気なんだと、保存会は迎える準備に奔走した。4月、田中一家4人は4トン

トラック2台を引き連れて、築60年で20年間空いていた家に引越してきた。「子どもたちはすぐにセブンイレブン

もファミリーマートもない生活に慣れました。こういう田舎にはまた子どもたちのタテ社会(異年齢集団)もある

しね、遅く育っていますよ。過疎はマイナーだという見方があるようですが、こつちの方が、人間が生きて暮していく場として、まともなんだよな」

「百姓はいま暗いべ、  
PARTと明るく楽しくせんと」

百姓保存会は3年ほど前に、大石田町の駒籠地区で誕生した。メンバーは海藤平太さん(代表・養豚業・昭25年生)、田中正信さん(事務局長・昭27

今年はいかがが不作だったが「山形の元気豚」の  
 フンを使って有機栽培する袖崎さんのは豊作。 埼玉県から一家で引越してきた田中さん。昔  
 ながらの機械を使って田の草とりをしている。



年生)、星川松雄さん(生産販売部長  
 ・昭27年生)、星川栄さん(事業部長  
 ・八勝工業代表・昭32年生)、星川憲  
 一さん(企画部長・町会議員・昭23年  
 生)の5人である。  
 「百姓はいま暗いべ。一〇〇軒ほどあ  
 る駒籠でも、本気で百姓やる若いもん  
 は何人もおらん。俺たちは百姓をパ  
 ーッと明るく楽しくやろう。ネットワ

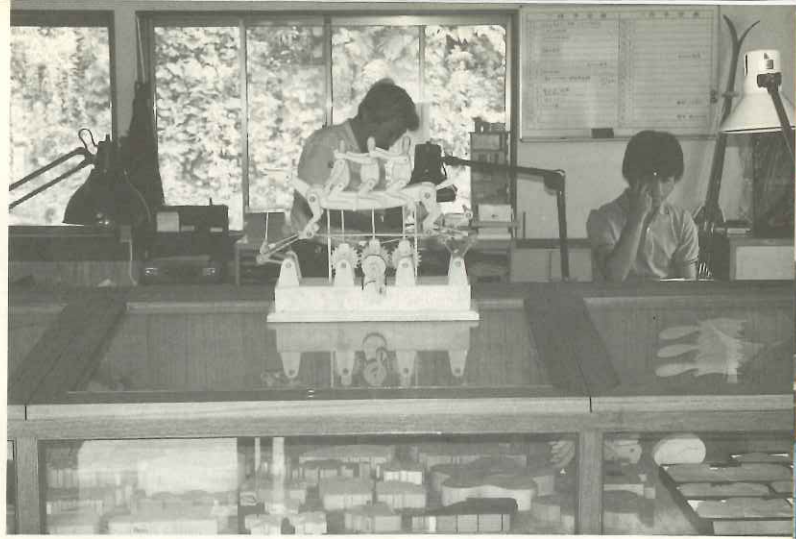
ークで駒籠と都会の消費者を結びう  
 いうことではないかなこと始めたわけさ」  
 保存会の交流拠点のログハウス。平  
 太さんが話すそばで、もう一人の心平  
 くん、海藤心平くん(小学5年生)が、  
 地卵の殻の汚れを拭き取ってバックに。  
 ログの隣りに鶏舎があつて、50羽ほど  
 の多種のニワトリを放し飼いでいる。  
 その自然一〇〇%の卵である。こうい  
 う卵を毎日食べられる生活が心底うら  
 やましい。妻の晃子さんは、都会の子  
 どもたちに「おこさん(蚕)を送る準  
 備をしている。大石田町が10年ほど前  
 に、40haの桑畑を造成して養蚕を奨励  
 したが、従事者は年々先細りに減り、  
 いまにも絶えそう。保存会はその大浦  
 地区の養蚕のおばあちゃんたちを元氣  
 づけるためにも、都会の子に神秘的な  
 蚕の生態を観察させてみよう、発送  
 用の箱がそのまま蚕棚になる「カイコ  
 セット」を開発したのである。  
 野菜セットの宅配は保存会が生れた  
 当初から、送料別2000円で首都圏  
 の生協や共同購入会などのネットワー  
 キングに乗せた。それまでは余れば捨  
 てていた自家用野菜が喜ばれて、ファ  
 ンが定着した。いまはFAX注文に応  
 じて地卵もサクランボもスイカもメロ  
 ンも送る。ログハウスの直販所でも飛  
 ぶように、とまではいかないが、かな  
 り売れる。

この建坪10坪ほどのログハウスは、  
 昨年の六月からメンバーやその子らが  
 共に汗を流した一〇〇%の手づくり、  
 一年かかって完成した。誰でもいつで  
 も集まって語り合えるよう、自炊で宿  
 泊もできる造りになっている。  
**百姓の子は、まず  
 百姓仕事を楽しめがモットー**  
 夕方、平太さんの車で松雄さんのメ  
 ロン畑へ連れていってもらった。独特  
 の網目もきれいに張って完熟したアム  
 スメロンがいつぱい香気を放っている。  
 長女の朋子さん(中学3年生)、次女  
 の加代子さん(小学6年生)がいかに  
 もたのしそうに収穫している。ここに  
 はいなかったが長男の祐一くん(小学  
 4年生)も「なんでも仕事はいっちょ  
 まえ、ふつうの大人に負けないよ」と  
 松雄さんの弁。田畑に子ども姿が見  
 えなくなつて久しいが、「勉強は二の  
 次、百姓の子はまず百姓仕事をたのし  
 め」が保存会のモットーである。  
 栽培者が違う隣りのスイカ畑は長雨  
 のため葉も葎もとけてしまつて、食べ  
 られない大きな球がゴロゴロ打ち捨て  
 られたままの惨状。松雄さんのスイカ  
 づくりとの差は、本気いかにによるの  
 だろうか。彼は冬期間はタンクローリ  
 ーの運転士として出稼ぎにいき、静岡  
 出身の奥さんとはその縁で知り合った

子ども達も木の皮をむき、丸太小屋づくりに参加した。



という。  
 保存会の宅配事業は、いろいろな学  
 習会を開いたり、ネットワークの輪を  
 広げる活動資金づくりなのである。そ  
 の活動の一環として月に一度出してい  
 る手描きコピーの通信「土理偉夢(ど  
 りむ)は、土の香りがしてメッポウ面  
 白い。  
 土の力はえらい。その大地に立つて  
 たのしく本物の農業を営み、あつたか  
 な仲間づくり地域づくりをめざす夢  
 いま、百姓保存会の面々は、すばらし  
 く輝いている。



メンバーたちと忙しく作業するクラブハウスの一泊。右側が西田さん。

# クラフトマンたちの新しい出発 おもちゃの里づくりをめざして(岡山県・東粟倉村)

とも大きく関わることになるクラフトマンたちの移住は、村民たちにとっても大きな関心事となった。

## クラフトを村づくりの柱に

西田明夫さんは現在、東粟倉山の山の上に建つクラフトハウスの代表。もとはといえば長野県白馬村で13年間、ペンション経営をしていた人だ。木工は趣味で以前から始めていた。その西田さんと東粟倉村とはどんなふうにして出会ったのだろうか。

「これが面白い縁でしてね。白馬でペンションをやっていた時、アルバイトをしていた若者が、この東粟倉村の出身だったんです。僕ももとの出身が神戸ですので、全く関心のない地域だった訳ではなくて、いろいろと話を聞くうちに興味をもってきたんですね。その若者は結局村へ戻り、今は村会議員をやっています。」と、西田さん。

こんなことが縁となり、やがて西田さんは東粟倉村の「村おこし会議」に度々、参加するようになった。これからどんなに時代が変化しよう

とも、変わらずに受け入れられるのは「文化」ではないか。その文化の中でも特にクラフト・木工にこだわりたい、そしてゆくゆくはこの村を「オモチャの里」にしたい。

この提案は大きな説得力をもち、議会ですんなりと受け入れられることとなった。そうしたことと平行して、西田さんの心の中にも少しずつ変化が生じてきた。

「村おこし会議に何度か参加しているうちに、この村の佇まいがだんだん好きになって、同時に自分が住まなければ無責任なこととは思えないと思うようになってきたんですね。それでいろいろ悩んだ結果、白馬のペンションをたんでこちらへ移り住むことを決心した訳です。」と西田さんは語る。

それにしても13年間も経営していたペンションをたたんでの移住——それには大きな覚悟が要ったのではないだろうか。

「こちらに移るにあたっては、村長に条件を一つ出しました。会議でも提案したようにこの村をオモチャの里にしたいということを再度申し入れ、そ

のためのクラフトハウスを建ててほしいと要請しました。村長の快諾を得て、僕は意を新たにした訳です。」

こうして西田さんのオモチャの里づくりの夢は、最初の一步を踏み出した。

## メンバーも増えてきて

針葉樹の林の中を、緩やかに勾配をあげながら一本の林道が伸びている。その林道を登りつめて行くと、突然目の前にクラフトハウスのモダンな建物が現われる。隣にはしゃれたペンション「田舎の日曜日」が並んでいる。どちらも北欧の民家お城のようだ。

入口に「オモチャ研究所」と書かれた看板が下がっている。中では西田さんをはじめとするメンバーの人たちが、来客と応待したりデスクに向かってアイデアを練っていたりと忙しそうだ。

西田さんが創るのは殆んどがオルゴール。北米産のスプルスという木材を使った大がかりなからくりオルゴールは特に見事だ。相棒の若林さんの創ったからくり時計も素晴らしい。このクラフトハウスには「教室」も備わっていて、ここでは隣のペンションの宿泊客





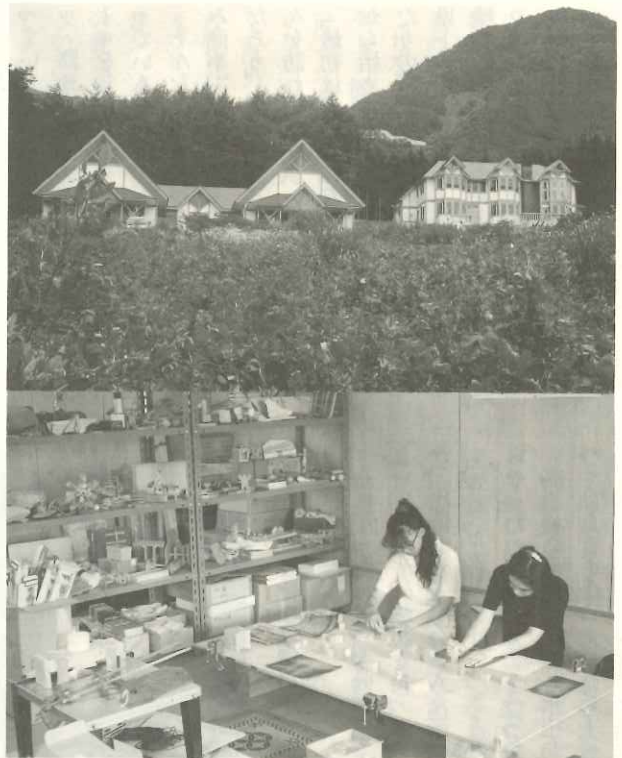
や村の子供たちが、木工を初歩から教えてもらうことが出来る。取材した日も、名古屋から来たという二人連れのOLがメンバーの一人から楽しそうに指導を受けていた。

ここでは会社組織のような上下関係は一切なく、あくまでもクラフトマンという一人ひとりの単位を大事にし合い、互いに協力し合って行くという方針をとっている。創るものも販路の開拓などもそれぞれが行い、協力できる部分では助け合う。メンバーも一人二人と増えてきて、今では殆んどメンバーがこの村に移り住み、この村での暮らしを楽しんでいるという。メンバーの中には日本を代表する玩具作家の集まりである「日本オモチャ会議」(西田さんも会員になっている)の事務局長小黒三郎氏などもいたりして、多彩な顔ぶれが揃っている。

こうしたさまざまな個性と技術を、オモチャの里づくりにどう活かして行くか、西田さんたちの課題は、今後ますます増えて行くことになりそうだ。

### 「田舎の日曜日」で、 テニスもゴルフもしない休日

このクラフトハウスの隣に建っているのがペンション「田舎の日曜日」。クラフトハウスより半年ほど早く建ったこのペンションは西田さんの経営に



上/小高い山の上に立つクラフトハウスとペンション「田舎の日曜日」。  
下/ペンションの泊り客が楽しそうに木工の指導を受けていた。

よるもの。白馬でのペンション経営の経験を活かして、本当に心からやすらげる場を、との意図から建てられた。

西田さんは言う。

「今のリゾート地はどこへ行ってもとにかく忙しいですよ。スキーだゴルフだテニスだ、何かお客さんにさせないとサービスが悪いみたいな感覚で、でも本当に何もしていないのんびりしながら自分を戻したいというんだって多いと思うんです。ウチではですからテレビもなければ、音楽もリクエストがない限りかけません。それでもお客さんはお喋りしたり、本を読んだ

りと楽しんでくださっています。」

そんな西田さんの考え方に共鳴してか、このペンションには遠く名古屋や神戸などからもお客がやってくるという。村にとっても外から人がやってくることは大いに歓迎すべきことであろうし、クラフトハウスとの相乗効果も大きなものがあることだろう。

神戸という都会育ちの西田さんが白馬に住み、やがてその土地を去り、今こうして鳥の囁きの聞こえる自然のまっ只中の暮らしを選択した。西田さんの顔からも他のメンバーの人たちからも、モノを創りだす喜びと生活の楽し

み方を十分に心得た人ならではの自信のようなものが窺えた。

このクラフトハウスの活動は東栗倉村の中ではどんな位置付けをされているのだろうか、村役場企画室の竹内係長に訊いてみた。

### 「愛の村構想」

「東栗倉村では『愛の村構想』という大きなプランがありまして、その中に音色、創造、自然という三つの柱を設けています。クラフトハウスの活動はその中の創造の分野の活動と捉えています。また、音色という分野では日本一といわれる鐘と鐘楼を日名倉山に設置したり、年一回のオルゴールコンサートも好評を得ています。自然の分野では村内の自然を大切に、親しんでいこうというものです。」

これからこの三本柱をより充実させていくために、十分な予算を用意して村づくりを行っていこうと考えています。

昭和25年には2、600人だった人口が現在では1、500人。高齢化が進むこの村で、クラフトハウスの新鮮で若々しい活動は、大きな期待を集めている。



仲間たちと繰出で、今日は用水路の土手の草刈り。まむし対策や大水を防ぐためにも欠かせない作業。



## 初めは農機具の有効利用から

「農作業引き受けます」とワープロで書かれたチラシが、ある時山口、萩一带の農家に配られた。チラシには請負内容とその料金が細かいメニューになって記載されている。

# 農作業請負業は、人手不足農家の心強い助っ人

(山口県むつみ村)

チラシを配ったのは農作業請負業むつみ商事の代表、山田和男さんとその仲間たちだった。

山口県阿武郡むつみ村。総面積の7割を山林が占めるというこの村は、緑の山と水田の緑が見事に調和した美しい村。山田さんはこの村で農業を営むかたわら、大工職人として、また「むつみ商事」の代表として多忙な毎日を送っている。去年は水稲101ヘクタール、路地野菜50アール、ハウス2・7アールを栽培し、今年も同様のものを作っているという。

そんな山田さんが仲間たちと「むつみ商事」を始めたキッカケは何だったのだろう。夏の一日、むつみ村に山田さんを訪ねて話を訊いた。

「最初は農機具の有効利用ということから始めたんですよ。この村は農家一戸当たりの経営耕地面積が15.9アールと、県下一の広さでね、個人が持つとる農機具の所有率もやっぱり県下一なんじや。ところがね、2ヘクタール位だと、実際に農機具使うのは5日位で済むんですよ。それが300万円とかするものでしょう。それが2、3台あっても、あ



むつみ商事代表の山田和夫さん。農閑期は大工職人として腕をふるう。

との360日位は納屋の中で遊んどる訳じゃ。

それだったらもっと効率良く使おうということ、機械を持つとらん所とか、高齢者で人手のおらん所は、うちらが行って作業しよう。そんなことから行ったね、キッカケといったら、高原状の台地に広がる水田から、かつては良質の山口米が毎年大量に収穫された。今もむつみ村では稲作の他、

年平均13・2度という冷涼な気候を活かして、トマト、メロン、スイートコーン、レタスなどの栽培が行われている。

しかし、そんな肥沃な土地をもつこの村にも高齢化の波は確実に訪れている。村民の4人に1人はお年寄りという現実、農業の現場にもさまざまに陰を落とし始めている。神経痛で腰を痛めたり、喘息や高血圧など、老化に

よる病気で農作業に出られなくなる老人も増えてきた。息子は儲らない農業に見切りをつけ、町へ出たきり戻ってこない。かと言って、先祖代々受け継いできた土地を自分たちの代で売り渡してしまおう訳にもいかない。

そんな葛藤に苦しむ村の老人たちにとって、「むつみ商事」の出現はやはり心強いものであったに違いない。

### 農業をつぶしたくないから

「むつみ商事」の開業は昭和63年。初めてチラシをまいた当初、その反響は僅かなものだったが、今では遠く

山口市や萩などからも声がかかるようになったという。農家からの注文は田の荒起し、荒代かき、田植えなどから薬剤散布、コンバインでの稲刈り、乾



燥、架干しなどというろろだ。息子が町

へ出て帰ってこない高齢者の家、ケガをして作業ができない農家、冠婚葬祭のある家など、依頼する農家の事情もさまざまで、「世相を見事に反映しているね」と山田さんは言う。

ちなみに田植えの料金は、オペレーター、機械込みで、圃場整備田の場合(反当たり)4,000円。未整備田で5,000円。コンバインを使つての稲刈り(反当たり)18,000円。薬剤散布(反当たり)1,500円。脱穀(反当たり)8,000円となっている。また、コンバインやトラクターなどが注文主の農家にある場合は、オペレーターのみの派遣となり、村内で男性1時間1,000円、女性600円、村外だと男性1時間1,500円、女性1,000円。女性が少し安すぎるので、現在料金の値上げを検討中だという。

こうして農作業という労働を、金額に換算して体系だててみると、農の風景もまた、ひと味違って見えてくるように興味深い。

山田さんたちはこうした農作業を部分毎に請負うやり方の他に、人手が全くなくなった農地や減反で何も作っていない農地などを、まとめて借りあげ、全体を自分たちの好きなやり方で耕作する方法も考えている。農地の所有者とは、土地に関する貸借関係だけで、作るものは水稲、露地野菜など自由に

作らせてもらう。これだと機械も一台ですむから効率もいいという訳だ。

「農地なんてね、何も作らないで放っておけば、アツという間に草や木の根がはびこつてきて、二年もしないうちに使えものにならなくなってしまふんよ。荒らすのはアツという間だけ、それを元に戻すのは容易なことじゃないからね」と、山田さん。

実際に何も作らなくなった荒れ放題の農地を、最近あちこちで目にするようになった。豊かな水と緑に恵まれたこの日本で、作物が作られなくなっていく光景は、何とも殺伐として寂しいものだ。

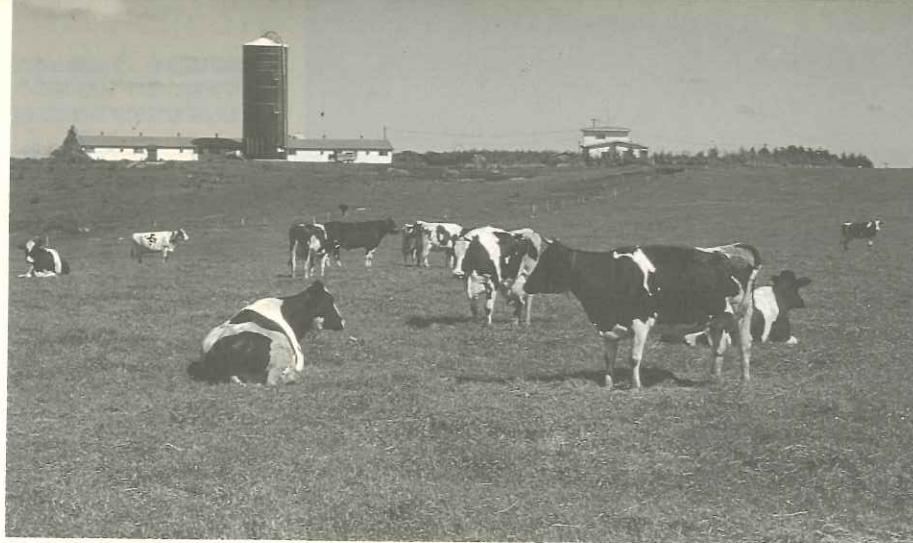
「むつみ商事」のスタートは農機具の有効利用からという合理性から始まったものだったが、今ではメンバーの誰もがこの村の農業を守っていきたいと、本気で考えている。「採算はとれていきますか」と尋ねたら、「いやあ、まだまだボランティアみたいにもんで」と、山田さんたちは明るく笑った。

帰りの新幹線が東京に近づく頃、「田舎はいよいよオ。のんびりしててさ、人間味があつてさあ」と言った山田さんの言葉が、ずっしりと重く甦よみがえってき



自宅の脇では大根やレタスなどの露地野菜を作っている。

# 大自然の中で、自分の人生とゆっくり向き合っていたいきたい 酪農家へ嫁いできた都市の女性たち（北海道・別海町）



美しい牧場のまち、別海町。

## 中学校教師を2年で辞めて北海道へ

「酪農」と「水産」という二大産業に支えられた広大な町―別海。新酪農村として乳牛10万頭を保持し、生産日本一を誇るこの町も、後継者問題は深刻だ。別海町役場では昭和49年から農漁村後継者結婚相談所を設け、とりわけ花嫁獲得作戦にさまざまな方策を打ち出している。今回の取材では、責任相談員の刀祢谷さんの案内で、道外から酪農家のもとへ嫁いだ女性二人を訪ね、いろいろなお話を伺った。

浜岡（旧姓宮沢）千里さん（26歳）は、長野県出身。大学卒業後一年間は、地元で中学校で国語の先生をしていた。学生時代の酪農実習が別海町との出会いのきっかけだったという。「大学三年の夏休みに、バイトを兼ねて北海道を旅行しようと思いついたんです。ゼミの先生から酪農実習のことを聞き、面白そうだなと思って。今のダンナさんはご近所の息子さんで、そのときはちょっと言葉

と言葉が交わす程度だったんですよ」

別海では四軒の酪農家が共同で牧草の刈り入れを行うシステムになっている。今日はこちら、明日はあちらと、みな一斉に牧草地に出、夜は集まって賑やかに過ごすというのが通例だ。実習が終わって長野に帰った千里さんのもとに、太司さん（34歳）からの手紙が届き、それから二人の文通が始まった。

「両親はやっぱり行かせたくなかったみたいですが。教員試験に通ったせいもあって、卒業してからは一応先生になったんですけど。情熱があったっていうのか、若かったっていうのか、それだけダンナさんのことが好きだったんでしょうね」

頼れる人は太司さんしかいない、見知らぬ土地での生活は最初のうちやはり辛かったという。はじめは反対していた実家のご両親も、今では娘の千里さんより孫の旭くんが可愛いくてたまらないとか。二歳とは思えないほど立派に成長している旭くんの本日のおや

浜岡千里さんと旭君、ご両親。左は畜産に大変熱心なご主人の太司さん。



つも、実家から送られてきた餅だった。「もともと自分も都会育ちではないし、こういう生活は合っていたんでしょね。仕事は忙しくて大変だけど、都会の人みたいに息せき切って生きてるって感じはしないでしょ。やるときにやって、あとはのんびりマイペースで過ごせるのはいいです」

ここ数年ゆとりが再認識されるようになってきたとはいえ、都会の人の生活は遊びでさえ慌ただしい。ともすれば消化不良をおしごちな都会の生活に比べ、ここでは自然を相手にしながら、自分をゆつくりと見つめ直すことが出来る。

「でも都会で悠々とシングルライフを送っている人たちのこと、羨ましいわあつて思うこともありますよ。子育ても、酪農も、やり方一つでまだまだ自分の時間を作ることはできるんですけどね」

髪を束ねている横顔には、まだ少女のような面影を残している千里さん。ダンナさんと旭くん、それに千里さんを娘のように優しく見守るご両親と一緒に頑張ってくださいね。

## 「自分の場所へ戻ってきた感じ」

桐島(旧姓木下)富美子さん(31歳)は、大阪出身。ダンナさんの博さん(35



歳)に初めて会ったのは、六年前別海町・大阪市が提携して行った交流会に参加したとき。これは後述する「菊と緑の会」の前身にあたり、当時は全道の酪農家青年60人が二泊三日の日程で大阪を訪れた。参加した動機を尋ねると、

「すごく北海道好きだったんです。会社に勤めていたときにも四回ほど旅行していたかしら。交流会には友達に付き合っただけなんです。そしたら自分がこんなふうになっちゃって、交流桐島富美子さんとご主人の博さん、二人の子供たち。

会のあとは文通での交際が半年ほど続きました」

今では二人の子供のお母さん。おやつを食べてお腹いっぱいになると、二人とも富美子さんのそばでうとうとと始めた。

「両親はそりやもう大反対でしたね。」

それを押し切ってこっちに来ちゃったせいもあって、淋しいなんて言ってもらえませんでした。辛いことがあっても、帰ったらおしまいだっていう感じ。それは今でも同じですけど」

頼もしい返事に、単なる北海道好きを超えたものが感じられた。北海道は多くの人を魅了するが、富美子さんの場合は生活そのものに根づく何かに共鳴したのかもしれない。

「実際に酪農をやって生活しはじめたとき、以前抱いていたイメージは吹き飛んでしまいましたね。目の前に雄大な自然があっても、それでどうだっていうことはないんです。そのかわり、自分はずつと以前からここに暮らしていたのかもしれないって思いました」

北海道の自然は旅行者の期待を裏切ることはない。だがいつまでもイメージに固執しては、実際の生活を始めることはできないだろう。動物と自然を相手にする酪農家の生活は、季節ばかりではなくその日の天気に応じて一日の過ごし方が全く異なる。富美子



さんのように「以前から暮らしていた」と言えるのは、生活環境にうまくなじんでいった人の例だと刃谷谷さんは言う。

「親の代を受け継いだ四年目あたりから落ち着いてきました。共通の趣味なんて考えたこともなかったけど、これからもっと時間を作っていろいろやってみたいと思っています。酪農家の妻という立場からだ、結婚と仕事を別々に考えてどうのこうの言うことはできないんですけど、やっぱり寄り添い合っが必要なんじゃないかしら」

博さんはソファに腰掛けたまま黙りっぱなしだったが、子供に小声で話しかけるときの優しい目が印象的だった。



## 都会との交流会も 今年で80回目

別海町の結婚適齢期の男女比は3対1。道外から花嫁を確保しなければならないのが現状だ。ちなみに昨年の統計をみると、別海・上春別・中春別・西春別・計根別全体での農村関係における成婚数は26組。そのうち町内出身の女性は9人、道外出身は7人である。過去17年での道外出身者は170人。そのうち大阪府が50人を占めているが、こ

れは先に述べた「菊と緑の会」の力によるところが大きい。

同会は大阪府枚方市と別海町の主催による交流会で、今年9月で80回目を迎えた。大阪・奈良・京都をはじめ近郊の都市から例年30人あまりの女性が別海町を訪れ、観光を兼ねて町の青年との交流を楽しんでもらおうという企画。3泊4日の日程には、ホテルの宴会場で行われる歓迎会を始め、野外バーベキュー、酪農家見学、近郊の観光など盛り沢山だ。中盤からフリーリン

「菊と緑の会」。野外バーベキュー、パーティ、酪農家見学等を通じて交流の場には。



親代り役もつとめる相談員の刀祢谷さん。

をかけ、同時に心配しているであろうあちらの実家とも連絡をとる。

「農村の後継者問題は日本の食糧事情に直接大きく関わってきます。農村それ自体が日本の風土を支えているとも思っています。そういう全体的な問題として取り上げることと同時に、個人の生活としても考えられます。自然のことに關しても、環境だの自然保護だの言ってる人達がどれほど自然と親しんでいるでしょうか。ここではワラビ、フキ、キノコなどの自然の恵みがいっぱい。こういうところで自分の人生とゆっくり向き合っているのも素晴らしいことですよ」と刀祢谷さんは語っていた。

グ合わせなども行われ、カップルが誕生すれば一対一でのデートも。

費用は3万円程度と片道航空券分という安さ。主催者の側から一人当たり約8万円の援助費が出されるという。これでは最初から観光目当てで参加する人もいるのではないかという問いに、相談員の刀祢谷さんは、

「もちろんそういう人もいますが、それでも実際土地の人と話すだけでもぶん違えますからね。北海道を普通に旅行する場合、三日と腰を落ち着けることはないでしょ。自然の雄大さが人々の心にも根づいていることを知ってもらいたいですよ」

「菊と緑の会」で知り合い、めでたく結婚にゴールインするカップルは平均して年に4組ほど。新婚の家庭には折りをみて電話したり、家を訪ねてみることもあるという。親代りとして声



夜はデラックスな会食会。



9月中旬の土、日曜日、「波之利大黒天」の祭りがやってくると、足尾のまちはいよいよ本格的な秋を迎える。

この祭りの主役は、睦会メンバーのくり出すみこし。文献やお年寄りの話を参考にして古式ゆかしく復元したも

# 手づくりみこしは町の一大イベントに 足尾町の復興にかける町と住民たち

ので、7年たったいまでは足尾町の秋の一大行事として人気を博している。祭りの仕掛人・菅野伸光さんと、足尾銅山を観光に生かして活気をとりにどしつっある町の様子を取材した。

## 町内どこへでもなまはの出前に

睦会会長の菅野伸光さん(35歳)の家は足尾町の中心街で食堂を経営している。取材の約束の時間は午後一時すぎだったが、おそばでも食べようと早めにお伺いした。

その間、出前の注文が次々と入り、伸光さんとお父さんは休む間もなくオートバイや自転車で出前にとび出していく。ホッとしたのは午後1時もだいぶ過ぎてからだった。

「もう一軒出前をやっている店があったんですが、後継者がいないというところで、いまはどこへでも出前をしているのはうちだけなんです。やはり高齢社会というのか、お年寄りの独り暮らしや老夫婦だけの世帯が多くなり、こちらが届けるケースが増えました。元気がいることの確認にもなりますので



上/さつそうとした祭姿の菅野さん。  
下/駅に寄贈した手づくり座蒲団。

数とか金額に関係なく出前をするように心がけているんです」と菅野さん。元気が声がして、あつあつのおいしいおそばが届く。それを何よりも楽しみに待っているお年寄りの姿が目につくかぶようだ。

菅野さんの家は、祖父が足尾銅山で当時モダンなガソリン車の運転手をするためにこの町にやってきて住みつき、父の代に現在の食堂を開いたという。

「私が中学校の頃は、いずれ閉山するという話がありました。人口は一万人以上いて、まだにぎわっていました。



それが48年12月に完全に閉山してからは毎年1000人以上が町を出ていき、現在5000人。そのことを実感するのは、授業参観などで娘の学校へいったときです。僕らの頃は何クラスもあつたのに、いま一クラスだけ」  
そんな町の現況をみて、「残っている人で何かやろうじゃないか」と呼びかけて誕生したのが睦会だった。  
町に古くから伝わる「波之利大黒天」の祭りを復活し、みこしをかついで町中を練り歩こうというもので、7年前にスタートさせた。

### おれづくりも自分たちの手で

もともと祭りが好きで、関東周辺各地の祭りにも参加してきた菅野さん。やるなら自分たちの手作りのものを本格的にと、町の長老たちにも会って調査研究を重ねた。

みこしは町の神社に奉納してあつた古くからあるもの。ハッピ等の衣裳類は母親たちに頼んで作ってもらつた。かつぎ方、練り方も古式の伝統にとり、最初の一、二年間は各地の祭り保存会の人々が助っ人にやつてきた。

「いまでこそ町中のみなさんが楽しみに待っていていますが、はじめた頃は、あの人たち何をしているんだ」とみんながびびりして見てましたね」  
現在会員は50名。家族参加を呼びか

けているので、小学生から50代の人までと幅が広く、この家庭的なつき合いが、町内清掃や町の文化活動への参加などにも生かされている。

ユニークなのは、「波之利大黒天」のお札から交通安全カード、ワッペンなども全部手作りし、それを祭りの日に住民たちに無料で配ること。お年寄りから、大黒様のありがたいお札として大もてで、賽銭や寄附金が寄せられる。これを全部貯金しておき、駅の待合室に座蒲団を作つて寄贈したり、町内美化活動などに役立てている。

祭りが近づくと、菅野さんの食堂はお札作りなどが夜を徹して行われる。

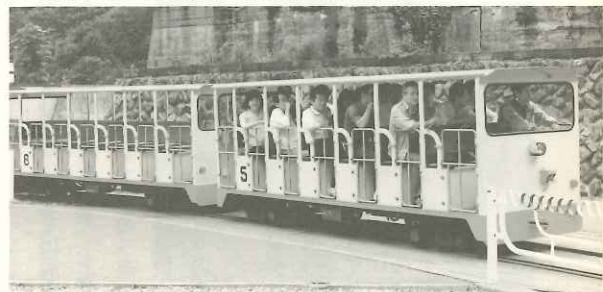
以前は日曜日に町の中心・東地区だけを練り歩いたが、銅山跡地のある西地区からの要望も強く、土曜日は西地区、日曜日は東地区で行っている。会員以外の参加者も多く、昨年は女子高生のういういしいハッピ姿が人気を呼んだ。

「祭り以外にも楽しい企画をいろいろやっていたいですね。夢は波之利大黒天神社を復興することですが」と菅野さんは目を輝かせていた。

### 足尾銅山は観光のスポットに

かつて足尾鉾業鉄道といわれていた桐生→足尾本山間を結ぶ電車は、沿線の人々の熱い思いで第三セクターの「わ

三二電車に乗って銅山へー銅山観光が人気。



たらせ渓谷鐵道」となった。渡良瀬川を眼下にみながら露天風呂が楽しめる水沼駅、「足尾焼」で有名な陶芸の共同作業所がある間藤駅など、駅を活用した施設や人々の交流も盛んで、鉄道マニアにも人気を呼んでいる路線だ。

通洞駅が「銅山観光」の拠点。役場菅野さんの食堂をすぎて5分も行くと渡良瀬川のとりに銅山観光がある。資料館をみたあとミニ電車に乗っていくとたちまち冷んやりした坑内に入る。全長700mの坑内には、江戸時代から大正、昭和に至る400年間の銅山の歴史が人形などを使って再現してある。実際に掘り開いた坑道の長さは1234km（東京→博多間の長さ）というから、展示場としての規模は小

さいが、銅銭や鉾石に関する知識をわかりやすく展示した「鑄銭座」などの資料館もあり、銅山の歴史を肌で知ることができるといえる。

町の観光課や教育委員会、文化財関係者が時間をかけてつくつた観光パンフレットには、足尾銅山により発生した公害問題にも充分ふれながら足尾町の激動の昭和史が記録されており、いわゆる観光地によくみられるような派手さはないが、観光地足尾をめざす町の熱意と誠意が感じられる。

山には緑、川には魚の棲む清流が戻つてきた足尾町は、クルマで日光へも20分。観光地として豊かな自然郷の一角を担い、人々の生活にも安らぎが感じられる平和な里であつた。



# トメさんのめんこいタンチョウ

ネイチャーライター 中村玲子

自然・大地からの提案

## 30年以上給餌を続けている ツルばあさん

七月の末、久しぶりに北海道釧路湿原に行ってきた。昨年の秋、湿原の畔の標茶町塘路に借りていた「山の家」を引き払って以来、九か月ぶりの「里帰り」である。

日本一の広さを誇る、面積二万一千餘の平らな釧路湿原は、短い夏の盛りだった。

秋には真っ赤に枯れていたヨシ原はすっかり姿を変え、伸びきった若いキタヨシが濃い緑の絨毯になって湿原を埋めていた。ヨシより頭一つ高い位置で、白いセリと、ピンクの



釧路湿原で野鳥の観察をする中村さん。

ホザキシモツケの花が満開だった。トンボやチョウやアブが花の周りをせわしなく飛び回り、風が吹くと、青くさいような獣くさいような湿原の匂いが、肺いっぱいに充満した。

「いやあ、いいとき来たわ。二日前まで、たいた寒かったんだわ。ストーブ炊いてたんだけ。こっちは雨ばかりで、ぜんっせん、日が照らなかつたんだから」

鶴居村支雪裡のタンチョウ給餌場で、渡部トメさんが、いつもと同じ笑顔で迎えてくれた。

トメさんは、冬の間、家の畑にやってくるタンチョウにエサのトモロコシをまいてや

る給餌を三十年以上続けている「ツルばあさん」である。

「吹雪の日もマイナス三十度に凍る朝も、風邪をひいて熱があっても、休んだことがない。警戒心の強い野生のツルが、モンペに頬かむり姿でエサを投げてくれるトメさんにだけは逃げるどころかそばへ寄ってくるようなそぶりを見せる。ツルに悪さをしかけるものは、カラスでもキツネでも、観光客でも容赦しない、トメさんの心意気がツルにも通じるらしかった。

「しばれる冬サ、一生懸命生きてるんだもの。まんず、ツルつくらいめんこいもんはねえ」とトメさんはいう。厳寒期には百羽近いタンチョウが、トメさんの家の前に集まってくる。

## 人間とツルの生活域の接近で――

タンチョウは、人間の背丈ほどもある真っ白な体に、翼の先と首だけが黒く、頭のとっぺんが赤い、優雅なツルである。長寿と幸福のシンボルとして、日本人にはとりわけなじみ深い鳥だ。春から夏、北海道東部の湿原で繁殖し、秋から冬、釧路湿原の西側、阿寒町や鶴居村で越冬する。

昔は北海道だけでなく、北日本の広い地域に分布していた記録があるが、明治時代に乱獲されて、絶滅したと思われる。大正時代の終わり、釧路湿原の奥に数十羽が細々と生き残っているのが発見された。その後、地元の人の手厚い保護で、ようやく五百羽まで数が回復した。陰には、トメさんをはじめ、



根室・釧路地域に二十人以上いるタンチョウ保護給餌ボランティアの不断の努力があった。そして、このツルを見に、全国から大勢の観光客やカメラマンがやってくる。タンチョウは、道東の町や村にとって、かけがえのない

地域振興に役立っている。ツルと人の暮らしが持ちつ持たれつ、うまい具合に共存しているのである。

しかし、よいことづくめではない。人間とツルの生活域があまりに接近してしまつた結果、難しい問題も生まれている。

今年の春、衰弱して死んだ野生のタンチョウを解剖したところ、胃の中から溶けかけた鉛の重りが大量に出てきた。釣りに使うあの重りである。血液からも正常値をはるかにこえる鉛が検出された。

ツルやガン、ハクチョウなどの水鳥は、歯を持たないかわりに、筋胃（砂嚢）という特別な胃のなかに小石や砂を溜め、食物を強力な筋力で磨り潰して消化する。そのため、固い砂利などを好んで食べる習性がある。死んだツルは、小石と誤って、鉛の重りを飲み込んでしまったのだらう。重りは胃のなかで食べ物と一緒に徐々に磨り潰されて、有毒な鉛イオンとなってツルの体を駆け巡り、とうとう死に至らしめたのである。

三年前には、やはり死んだタンチョウの胃の中から、缶ジュースの引きフタのプルリンクがたくさん出てきた。観光客がポイ捨てしたのを飲み込んでしまったのだ。その後の調査で、これが決して特殊な例ではなく、ほとんどのタンチョウがプルリンクを飲み込んでいる可能性があることがわかった。ツルの生息地は、予想以上に人間の「ゴミ」で汚染されていたのだ。

もしタンチョウが、昔のように人間を恐れ、湿原の奥深く、ひっそりと暮らしていたら、

こんな事故は起きなかつただろう。人間はじめじめした湿地には生まれ、湿原の奥の方までは入っていくことができない。ツルのほうも、見慣れない人間にはたやすく心を許さなかつたろう。人間の捨てたゴミがツルを傷つけることはなかつたに違いない。

しかし、現代のタンチョウは、人間は自分たちの「仲間」だと思つている。撃たれるどころか、エサを与えてくれる保護者なのだ。ツルは、人間に対する警戒心を無くしつつある。釣り人や観光客が出没する人里近い湿地でも平気でエサを漁り、結果として、鉛やプルリンクを食べてしまう。

まだある。昨年、釧路市のツル公園で飼育されていたタンチョウが肝臓ガンで死んだ。ガンにかつた原因は、エサとして与えられていた輸入トウモロコシの残留農薬の疑いがあった。同じトウモロコシは、野生のツルにも給餌されている。ツルにとって、冬の間、最も頼りとなる食べ物、このトウモロコシなのだ。保護のために続けられていることが、かえってツルに害を与えてしまっているかもしれないのである。

しかし、いま人工給餌を止めてしまふわけにはいかない。道東の冬、十二月から二月は、わずかな湧き水のある場所を除いて川といい、池といい、すべて凍りつく。ツルがネグラーをとり、草の根や小魚、昆虫などを食べることでできる凍らない川や池は、一九六〇年以降の湿原の大規模干拓で、すっかり減ってしまった。三万羽といわれた釧路湿原もいまでは三分の二の大きさしかない。五百羽の野生の

ツルが、自然のエサだけを頼りに生き残るのは到底、不可能なのである。

野生動物と人間が共存する難しさがここにもある。

### ハクチヨウはもつとめんこい

ところで、渡部トメさんのタンチヨウ給餌場には、昨冬、思いがけない珍客が仲間入りした。二羽のヒナを連れたオオハクチヨウの家族である。

水掻きのついた脚をベタペタ鳴らし、尻をふりふりツルの間を闊歩し、トウモロコシをちやつかり失敬した。はじめはうさんくさそうに見ていたツルはやがてあきらめたのか、共存を許したという。三月の初めまで、結局一冬、ハクチヨウはツルと一緒に暮らしていた。

「いやあ、ハクチヨウってのは、ツルよりめんこい。あの歩き方がたまんね」とトメさんはいう。来年はハクチヨウのために、給餌用

の池をつくってやりたいんだという。「あのハクチヨウ、うちの畑を覚えてるだろうか。早く来ねえかなあ」

まだ夏が始まったばかりだというのに、トメさんはもう冬が恋しそうだった。

野生動物を、心の底から愛するトメさんたちの経験の中から、より賢い共存への知恵が生まれてくることを、祈らずにはいられない。

野鳥に会いに中村さんは時々湿原へやってくる。(塘路にて)



テレメータによる食草行動を  
観察する太田真先生。



### 動物たちの行動、習性を まづ理解すること

東北大学農学部のカンパス内はそれほど  
広くないので羊や山羊がいる程度だが、鳴子  
町にある附属農場は山林を含めて約2000  
畝あり、そこには牛300頭、羊120頭、

日本鹿20頭を放牧している。

これらの動物はいずれも反芻動物。つまり  
草を食べる動物たちである。人間が直接食物  
として食べることでできない草やワラを栄養  
にして自らの生命活力を営みながら、ミルク  
や肉を作ってくれる貴重な動物たちである。

東北大学農学部は、この反芻動物の研究を  
最も早い時期から行っており、戦後の食糧の  
乏しい時代に酪農の発展と、その後の放牧の  
推進に重要な役割を担ってきた。

日本の国土の約7割は山林で、残る3割に  
人間の居住区、耕作地、工場などがある。こ  
の7割の山林を活用する一翼として、牧場は  
畜産の振興という目的以外に、自然環境の保  
全や人と動物とのふれあいの場として貴重で  
ある。

私と牛との出会いは、戦後間もなく父が郷  
里の沖縄で酪農をはじめたことによる。戦時  
中、中国で製鉄の技術者だった父は畜産には  
素人で、幼い私たちも手伝わされた。そんな  
訳で、大きくなったら畜産を勉強して父の牧  
場を継ぐと決め、日大・獣医学科を卒業し  
た後、反芻動物の研究で知られる東北大学へ  
入ったのだが、私自身は研究者になり、父も  
後継者がいないということで辞めてしまった。  
しかし沖縄・石垣島には約3000頭の牛が  
放牧されており、私も年何回か出かけていく。  
日本の場合、放牧といってもモンゴル地方  
のように自然の中で放牧させておくわけでは  
なく、ある程度管理しながら生産性をあげる  
必要がある。大学の附属農場では週に二、三  
回放牧場を見まわり、一頭一頭の状況を観察

し、また冬は牛舎に収容して飼育している。

動物の研究には、分子、細胞、個体、そし  
てそれらが集まった群の各段階でさまざまな  
テーマがあるが、大学農場のようなフィール  
ドでは主に個体や群の生産とそれらをとりに  
く環境との関わりなどが研究の対象となる。

行動や習性を知ることが、家畜を理解し上  
手に育てる上で大切なことで、例えば人間  
なら暑いという場合、それを言葉で語ると共  
に、体温が上がリ、それを調整するために汗  
をかいたり、手やモノを使って風を送ったり  
する。それと同じようなことを牛たちもして  
いる。それを理解し助けてやるのが私たち  
人間の務めであり、結果的に生産性を高める  
ことにもなる。

### 生産効率を優先させてきた ことへの反省

しかし現実の世の中では、生産効率を重視  
することが最優先してきた。狭い牛舎で運動  
をする機会も少なく育てられた牛は、確かに  
肉質や牛乳の成分も人間の好みにコントロー  
ルされて良質で、生産効率は高いが、ストレ  
スが多くなり病気になるやすい。これは人間  
社会でも同様で、どこかにひずみが見られる。  
私は、長年「家畜管理学」を学生たちに講  
義してきたが、若い頃には生産性に重点を置  
いた管理の合理化、省力化、施設の工夫など  
技術論に偏っていたことを反省し、最近はお  
動物を飼うことがもつと人間自身のためになる  
という点を強調している。

身近に動物がいるということが何よりも素

# 牛と人の共和国を求めて

東北大学農学部助教授・農学博士 太田 實

## 自然・大地からの提案

晴しい。動物たちから、生きることの厳しき、喜びなどいろいろのものを学び、それが人やモノを理解する気持とやさしい心を育てる。

生き物が身近にいると毎日世話をしなければならぬが大変だが、酪農家や畜産農家が牛肉の自由化等のハンデの中で頑張っているのは、そこに動物とのふれあいがある、その素晴らしさを身をもって知っているからだろうと思う。

日本は家畜とか動物についての考え方がヨーロッパなどと違うように思える。かつて農家には家族の一員として牛、馬、ウサギ、ニワトリなどの家畜が大抵いたものだが、農業の機械化と共に、これらの家畜はみな淘汰されていった。とくに各地にいた馬たちは驚くべき早さで消されていき、いま競走馬がいる程度。広い敷地やエサにする食糧があり余っているながらニワトリを飼う農家すらほとんど見かけなくなった。

ニワトリの飼育は子供たちにとって恰好の仕事であるはずだが、最近では、農村の子供も家で手伝うことがなくなった。自然や土、生き物とのふれあいがないので地域への愛着も持たず、自然、都会へ都会へと憧れて出ていってしまう。

一昨年、アルゼンチンからミニホース「アラベラ」30頭が輸入された。150年かけて改良に改良を重ねたという大型犬くらい可愛い馬である。「動物園の展示用なのか、個人の愛玩用なのか」と問う私に、アラベラの牧場主は、「世の中に、目的のない動物が

いてもいいではないか。動物がいることに意義があるのだから」と彼は明解に答えた。

このミニホースはいま鳴子町の牧場において子供たちの人気者になっている。

### 人と動物の心地よい関係を

私は、生産効率や経済性を重視してきた現在の社会を反省し、見直す時期にきていると思っている。テレビなどに動物や自然を取り上げる番組が多くなったのも、人々の心が動物とのふれあいを求める気持が強くなっているからだろう。

東北の山村では、お年寄りの生きがい対策の一環として、個人が一頭、二頭と牛を飼う制度をとり入れ、大変好評を得ている。心をこめて育てた牛は肉牛としても良質である。

一時期、生産効率が悪いからと牛たちの放牧が低迷していたが、生産効率以上に、自然景観の良さや生き物とのふれあいの大切さが見直されて、村おこしの一環として公営牧場を復活する町村も多くなった。

そこに生きる牛や馬、羊たちののびやかで自然の姿を見ることが、私たちにどんなにか豊かな気持を与えてくれるかによりやく気づいたのである。

一方、現実の農家や畜産農家をみると、週休二日制はおろか、企業のめざす年間1800時間労働にはほど遠い過酷な労働時間の中で頑張っている。実は、何時間働いてどの位の収入を得ているかという実態さえはつきり把握しにくいのが実情だ。

この辺を今後改善していかないと、後継者不足、嫁不足は解消しない。

いま私たちは、一部の作業をロボットで行できないかと真剣に研究しており、少しずつ成果をあげている。例えば私の農場では、牛の首についた札をコンピュータのセンサーが自動的に読みとり、その牛に合せて飼料が出てくるようになっていく。単純な作業はロボットが手伝ってくれるようになれば、農家はずっと作業がラクになり、気持ちにもゆとりが生まれるだろう。

少し時間がかかると思うが、私たちの意識も変え、工夫も加えて、人と動物との真に心地よい関係を築きあげていきたいと思う。

自然の中でたくましく育つ牛たち(東北大・附属農場)。





# 遊び人をつくれ——嫁不足対策

山崎 充  
(静岡県立大学教授)

## ●農家だから嫁のきてがない!?

過疎地域にいくと、たいていの町村で「嫁不足」が話題になる。

男が30歳を過ぎたというのに結婚もせず一人であるのはなんとはなしに侘びしいし、不自然でもある。本人以上に両親は気をもむし、早く孫の顔を見たいという気持ちも強く、不安な日々を送っているに違いない。

まして親せきや隣近所の長男のところへ嫁がきて子供が生まれたとなると、なおのことヤキモキしてなんとか自分のところの息子にも嫁が……という気持ちになるのだろう。この気持ちは、よくわかるような気がする。

ところで、過疎地域でこのような「嫁不足」

が話題となると、決まって「農家だと嫁のきてがない」といった声を耳にする。このような声を耳にする都度、果たして農家だから嫁のきてがないのだろうかかと半信半疑になる。もちろん農家の後継者に結婚できない者が多いということは百も承知の上のことだが……。

最近、過疎地域で「嫁不足」を解消すべく、フィリピンなど外国から花嫁を調達してきて、なんとか辻褄を合わせようとしているところがある。それも、町村長が音頭をとってやっているところもあるようだが、大いに疑問である。なぜ嫁不足が生じたのか、その根本的な原因を十分に理解していないように思えるからだ。

実は、嫁不足はなにも農家の結婚適齢期の男性だけに起こっていることではなく、東京の一流会社に就職している一流大学を卒業したエリートにもみられる。嫁不足でもっとも深刻なのは、農家ではなくこの一流大学卒の一流会社のエリート社員であるという見方もある。これは、どうやら間違いないのではないだろうか。

### ●「デートしても楽しくないと女性たちは言う」

若者が結婚適齢期になったので、結婚願望は強いが、相手の女性が見つからないで困っているのは、わが国の現在の社会問題であるといえるようだ。社会問題というのは、少しオーバーであるとするれば、社会現象であるといってもよい。

女性の目からみて男性に魅力が感じられなくなつたという声が女性に多い。デートをしても、楽しく二人でオシャベリをする話題がない。二人の沈黙が長く続く。レストランに入つても、常識程度のグルメの話題もなく、ましてメニューから食べたいものを選べられない。歌や映画、人気タレントの話題を出しても、なにもわからない。

戦後の高度経済成長時代からしばらく後までのまだ貧しかったころだと、男性は大会社

のエリート社員で将来が嘱望されており、家が資産家であれば、結婚相手にはこと欠かなかった。二人で会った時に話題が豊富で楽しい雰囲気をつくってくれなくてもよかった。経済力や経済ストックがあれば、生活が豊かで安定しているのだから、それだけで十分だった。結婚してからメシ、フロ、ネルという言葉しか生活の中で使わなくても、女性は仕方ないと諦めた。

最近では学校でもてる生徒は、ユーモアがあり、冗談がうまく、元気で茶目っ気があるものだとわれている。必ずしも勉強のできる生徒ではない。一流大学から一流会社へという人生を歩んでいる若者は、学校では人気ものでなかった生徒であり、女の子にもてなかつたということになる。

農家に嫁のきてがないのは、男性に魅力がないからだ。女性がデートして楽しくなるような男性には、たぶん過疎地域でも嫁がいて二人で楽しい生活を送っているはずだ。農家の後継ぎが結婚できるようにするには、なんとしても人間づくりが必要である。

### ●「花婿学校」の開校を

過疎地域の町村長が嫁不足を解消しようと本気で考えるならば、フィリピンに飛びよりは「花婿学校」を早急に開校することが先決

だ。そこで、グルメやオシャヤレなどの常識的な知識、社交ダンスやスポーツなどを教えたり、映画や音楽会に出かけていく。東京のタウン・ウォッチングをやることも大切だ。

簡単にいえば、遊び人をつくるのである。「花婿学校」を卒業したら町村が近くの県庁所在都市ないしそれに準じる地方都市に特産品を売る店舗を開設し、若者に出資させて株式会社を設立してそこで販売をさせる手もある。仕事を通じて都会の空気を吸わせるのである。

このようなことをすると、農家の息子も人間的な魅力が一段と増してこよう。アカ抜けてくる。だが、両親は困惑するかもしれない。こうした人間づくりをやった上で都市と農村の若者の交流をやらないと、都市の女性にバカにされるのが落ちというものだ。こうなると農家の男性はますます自信をなくしてしまう。

太陽ときれいな空気の下で自然を相手に夫婦で仲良く仕事ができる。しかも、頑張ればそれだけ収入も増える。こんなに素敵なお仕事は、農業をおいて他にない。若い夫婦が仲良く働く光景が増えることを期待したい。

## ●特集2

ふるさとへの  
メッセージ

# 都会と農村のいい関係をめざして

都会と農村。なぜかいつも向かいあった  
対極におかれてきたこの両者。しかし都会  
にとつての農村は、農産物を供給してくれ  
たり、自然の景観を楽しませてくれたりす  
るかけがえのない「ふるさと」。また農村に  
とつても都会からの情報や文化的な刺激は  
無視できないものであるはずだ。

だとしたら、都市と農村はもっと互いに  
活かし合って、いい形で結びつくことはで  
きないだろうか。

農村と積極的にネットワークしているグ  
ループを取材すると共に、農村や山村に何  
を求めるところについて若者たちにインタビュ  
ーしてみた。

## 10年の交流が 大きな信頼感を育てた 生協の取り組み

村おこしの掛け声と共に始まった都市との  
交流、農村との交流が、最近あちこちの地域  
で叫ばれてきているが、その場限りの行事も  
多い。

そんな中で東京郊外にある北多摩生協の活  
動は、生産者である農村と消費者である都会  
とが互いに協力しあって、地道に良い関係を  
育ててきた好例といえるだろう。東京の西部  
小金井市を拠点とする北多摩生協の活動を追  
ってみた。

### 北多摩生協と 新潟県笹神村との交流

北多摩生協は組合員数6,837人(平成1  
年度)。東京の小金井市を中心に小平市、田無







市、府中市、三鷹市、杉並区、練馬区など13の地域を活動エリアとする生活協同組合だ。

この生協がここ10年近く力を入れて取り組んできたのが新潟県笹神村との交流。そのキッカケは組合員たちの「安全でおいしいお米が食べたい」という強い願いからだった。

それまでの食管制度ではたとえ消費者が〇〇のお米を食べたいと言っても、直接その産地の米を手に入れることは困難であり、農薬や化学肥料を使わない米の入手は、親類の農家などから分けてもらうしか方法がなかった。

北多摩生協では野菜や肉、卵、牛乳など、さまざまな産直を通して、生産者たちと直接結びついてきた実績を活かして、何とか米の産直もできないだろうかと考えてきた。しかし食管制度の前ではそれも不可能だろうと思われた。それでも諦めずに笹神村を何度も訪ねては小さな交流を重ねてゆく。そんな積み重ねの中から、少しずつ両者の間に信頼関係が生まれ、1年後にはもちや根菜類などの産直が開始された。

そして北多摩生協から新たに笹神村と同村の笹岡農協に次のような提言が出された。

「一連の農業つぶしの中で、純粋に食と農業を守るために消費者と生産者が共に真剣に考える必要がある。

・双方のエゴの発想ではなく、リスクを共同分担し、信頼感で成り立つ米の流通ができないものか」

こうした提言を受けて笹岡農協と笹神村は少しずつ動きを見せはじめ、昭和58年には産地指定的な扱いで、米の流通が始まることになる。そして昭和62年、食管法制定より4年目のこの年、「自然の生態系を活かし、化学肥料や農業を使わない特別の方法で栽培された米を、一定の条件のもとで生産者と消費者が直接取引ができる」特別栽培米制度が発足した。

### 田植えツアーや稲刈りツアーも恒例の交流会

この特別栽培米制度のもと、北多摩生協は地元笹神村、笹岡農協と一体となり、土づくりにから有機肥料の使用、省農薬の試みなどを実験田で3年に亘ってくり返してきた。

その間、田植えや稲刈り、また生産者との

勉強会を兼ねたサマーキャンプなど、都会の消費者も生産の現場に積極的に参加することで生産者や農協婦人部などとの交流も、一層深まっていったという。

生まれて初めて体験する田植えに、組合員の主婦や子供たちは喜び、普段何気なく口にしていたお米への意識が大きく変わっていったことも、この産直の成果の一つだと言えるだろう。そして今、「安全でおいしい」笹神村の「コシヒカリ」は生協組合員たちの食卓に毎日のぼるようになった。



## 夢にみた「生協の家」づくりも着々と進んで

足かけ10年になるという笹神村との交流。米の単作地域だったこの村も生協との産直事業を通じて、もちやしめ飾り、野菜、柿などと生産の幅を広げていった。そしてこの10年の交流のハイライトといえるのが「生協の家」の建設だ。2500㎡の土地を生協が笹神村から無償で提供されることになり、その調印式も3月に無事済ませたという。この土地に生協の組合員や職員がいつでも利用できる宿泊施設を建て、今後の交流の新しい拠点にしていこうというものだ。竣工は9月か10月。完成後の運営は生協が行うが、実際の管理やサービスなどには、村の人たちの協力をぜひ仰ぎたいと、生協側は期待している。

## 「自家用野菜セット」は産直のヒット商品

肉や卵、乳製品、野菜、鮮魚などに始まった北多摩生協の共同購入方式は、そのラインアップに特別栽培米の米が加わり、組合員には嬉しい品揃えとなった。そうした中で注目したいのが、ここ数年人気を集めている「自家用野菜セット」という産直商品だ。これは農家の人たちが、売るための商品としてではなく、自分たち用に作った野菜を一定の価格内で分けてもらうというもので、送られてくる内容は一切お任せ。あくまでも農家の都合に合わせて内容が決められるというものだ。

利用した組合員たちにも好評で、「田舎のおばあちゃんからの贈り物のようで感激しました」という声や「山菜にはアク抜き用の灰まで入っていて心暖まる思いがした」などの声が集まって、この商品を企画した高橋課長とスタッフたちを喜ばせている。

従来ある野菜の共同購入とは別に、あえて「自家用野菜セット」とした意図は何だったのだろう。発案者である高橋課長に訊いてみた。

「この北多摩生協もお陰さまで組合員数がこの数年でグンと伸び、組合員への供給高も大幅に増えました。こうしたことは一方で好ましいことではありますが、また一方で取扱いが大きくなることによる弊害も生まれてきています。例えば注文の商品が大量化することで、小規模な農家では対応できなくなってきたり、そのために作る作物が単一化したり、流通コストの効率化を図るために次第に商品を規格化したり。そうすると本来の産直の良さが失なわれていくのではないかと危惧していた訳です。今回のこの企画はまだ数量的には僅かなものですが、産直の原点にいま一度戻ってみようということ、農家のお年寄りたちのお小遣い稼ぎになればと思っただけでした。生産者は山形県大石田の『百姓保存会』というグループが中心になっています。組合員の皆さんからお陰さまで好評をいただき、また農家のお年寄りからも大変喜んでいただけましたので、これからも続けていきたいと考えています。」

## 田舎暮らしに憧れているけど近所づき合いが大変？

T. S子(26歳・銀行勤務)



私の友人で田舎暮らしに憧れて、ある山村へ移り住んでいた夫妻が、3年たち、再び東京へまいもどってきました。

農業自体は楽しく、つらくてもやり甲斐があったが、近所づき合いになれることができなかったというのが、その理由のようです。

毎週休日には、やれ清掃だ、講習会だ、スポーツ大会だと行事があつて、大変だといいます。

人間関係のわずらわしさから解放されたくて田舎暮らしをはじめた人だつただけに、この近所づき合いはプレッシャーだつたのかも知れません。

私は田舎へいつてマイペースでのんびり暮らし生活に憧れていますので、気にかかるところです。もちろん、田舎の人から教えられ助けられてこそ快適な生活があると思いますが、どの程度必要なのかなと……。



組合員からも生産者からも喜ばれる商品企画。それはまさに、安全で低価格という食べる側からの視点と、日本の農業や漁業を守るという生産者側からの視点との間に立って、両者のバランスを保ち続ける生協の姿勢そのものであるともいえるだろう。



# 「田舎の人たち、ありがとう」 山村留学で子供たちは たくましくなっていく

## 老夫婦の農家で暮らすS君

S君（小学5年）は2年前から長野県のあ  
る農家に山村留学をしている。父親の仕事の  
関係で小学校へ入って3年生になるまでに二  
つの学校を変ったため、友達ができず、しか  
もやや肥満児だったため、新しい学校ではす  
ぐそのことがアダ名にされてしまう。

夏休みに「育てる会」による「夏休み、山  
村留学体験会」に参加したところ、田舎がす  
っかり気に入る、両親の了解を得て、子供好  
きな老夫婦の農家にお世話になることになっ  
た。

「3人いる子供の末っ子。最初は大反対でし  
たが、主人も賛成でしたので一年間に限って  
という条件で出しました」とS君のお母さん  
は語る。

「子供ってすぐ適応し、親が思っている以上  
にしっかりしているんですね。会うたびに成長し、いきいきしていて、こちらの方が勉強  
させてもらっているって感じです。心配して  
いた勉強の方もなかなかいい成績で、きらい

な国語も、手紙など読むとびっくりするほど  
上達してきているかと安心します。

それにしても、親でも手におえないような  
現代の子供たちをあずかってくたさる農家の  
人達には感謝いっぱいです。それに、地域や  
学校の先生、ときどき巡回してくれる指導員  
の方々、みんながとても熱心に誠意をもって  
対応してくれます。こういう人たちとめぐり  
会えたことだけでも大きな財産です」

来年は小学校最上級生。中学受験などを考  
えて帰京させたいと考えていたS君の両親だ  
が、「本人が希望するなら田舎でこのまま暮ら  
すことも考えてみたい」と語っている。

## サト子ちゃん姉妹は村の人気者

サト子ちゃん姉妹は、長野県「伊那谷こぞ  
も村」の運営する「ダイダラボッチの家（泰  
卓村）に山村留学している。母親は新宿で飲  
食店を経営。子供たちとゆっくり夜の団らん  
が持てないと山村留学を決意した。夏休みに  
一週間出かけてみてふたりは田舎が気に入る  
留学、みんなの人気者になっている。



サト子ちゃん(小6)はダイダラボッチの家の子供会会長で、学校でも級長。妹のトモ子ちゃん(小4)は、台所仕事や動物の世話など、身のまわりのことによく気がつく子で、キャベツを切らせたなら大人並み、ニワトリ君たちとも友達である。

サト子ちゃんのお母さんは、

「子供たちに会いにいたり、休日に一緒にすごすのが一番の楽しみです。客商売で、子供にもつらい思いをさせてきたという気持がありました。子供たちは充分理解し、そんなハンデを持たずに育っています。指導員のお兄さん、お姉さんと兄弟のように接しているせいか、いろいろの知識を身につけてきたし、また年下の子供たちとの共同生活を通して、人に対するやさしさや思いやりのある子供たちになったと思います」と語る。

### 自然のやさしさ、厳しさを学ぶこと

山村留学とは、夏休みなどの期間を通じて、あるいは一年の間、子供を自然が豊かな村や町に送り、そこで生活させ、自然体験ばかりでなく、自ら積極的に行動を起こすように教育する活動である。

山村留学の先きがけとなった(社)「育てる会」(東京・吉祥寺市)は、元小学校の校長をしていた青木孝安氏の呼びかけで、昭和43年に発足した。昭和51年に長野県八坂村をはじめとする6つの自治体と提携して一年単位の山村留学をはじめた。はじめた当初、この企画に参加する児童はわずか9名だったが、昭和60年頃から山村留学に着手する自治体や団

## 親子がホンネで話し合うべき！ 過疎問題は農家個々の意識を変えることから！

東京 M・Y子(30歳・会社員)



私は長崎に老いた両親がいて、小さな雑貨店を営んでいます。一人っ子なので帰郷して面倒をみないといけないのですが、その機会を逸したというのが正直な気持ちです。

〇し生活二年の後、田舎へ行つてもやれる仕事を、ともとも好きだったハウスクンサルタントになる、とも不動産関係の資格をとるために専門学校へ通い、現場で勉強しようとする不動産会社に入社したのが運のツキ。辞められなくなり、30歳をすぎた今では役職もつき、かなり収入も多くなりました。両親は時々送金し、何かあつたらすぐ帰るから、と言っているのですが、母は「もう田舎へきてもオールドミスだと肩身がせまいから、東京でいい人をおつけて」といいます。

だからといって勝手に東京で結婚することもできず、田舎へ帰つて見合いなどする機会もなく、中途半端のまま、年だけはとつていくようです。父母がもつと強引に「早く帰つてきてくれ」と泣いてくれたら私も決心したでしょうが。

私の周りにも私と似た条件の人が何人かいます。最近の親たちは子供に甘いのか、辛抱強いのか、それともあきらめているのか、本気でホンネを語りません。例え結果がどうであろうと、もつと「帰つてほしい、帰るべきだ」と主張すべき。先日TVをみていたら、ある農家の老夫婦が「人子供がいるが、みな家を出てしまひ、私たちももう年とつてしまったので田んぼが作れない」と嘆いていました。それをみて、なぜ息子の一人位、農家を継ぐように育てなかつたかと思いましたが、時代のせいとか世代のせいとかいう前に、農民としての誇りと代々家を守っていくことがいかに大切かを、子供が小さい時から語りつくすべきでした。そうしたらきつと子供の誰かが農家を継ぎ、家を守る役目を担つたことでしょう。

過疎問題は、村や町の行政が取りくむのではなく、まず農家の人、一人ひとりが意識を変え、自分の問題として真剣に取りくむべき問題だと思います。

体の増加で山村留学児童の数は増え続け、平成2年では過去最高の483名、今年は540名前後が参加した。

「山村留学とは、いわゆる問題児を農村にあずけることではありません。都会っ子を農家で生活させることで、自然のやさしさ、厳しさを学び、農民の強い生き方を身近かてふれることで生活力、行動力のある子供に育てることです」と企画調整役の青木厚志さんは語る。

山村留学をした子供たち(小学生・中学生)たちは一年の間に田植えをしたり味噌をついたり、自分たちで植えた稲を収穫したりと、さまざまな農村生活を体験して積極的に育つていく。

「留学しはじめた時は何をしてもよいか分から



「ダイダラボッチの家」の子供たち。



ない子供たちも自然に親しむにつれて活発になり、一カ月もすると自分たちでやりたいことを見つけ出します」

留学後一カ月位して親が訪ねてきて、心配するのは親ばかりで、子供はけろりとしているそうだ。そこには自然を通してまさに自立していく子供たちの姿がある。

そのため、山村留学した子供の多くが二年三年と長期にわたって留学を続けている。

一方、サト子ちゃん姉妹が留学している「ダイダラボッチの家」を運営する「伊那谷こども村」は、南信地区の浪合村、泰阜村、松川町、高遠町の役場および教育委員会が行っている都市との交流活動機関で、春休みや夏休みの文化活動を入れると年間1500人の子供達が参加している。

村の人の協力を得て指導員たちが何もかも手作りしたという「家」には、いま20人の子供たちと5人の指導員が生活を共にし、子供たちは村の南小学校へ通学している。児童数50名の南小学校にとって20人の都会の子の在

籍は村にとっても子供たちにとっても大きなプラスになっている。

### 田舎の子供の方がラクをしている!?

山村留学を受入れる地方や自治体への注目を関係者たちに聞いてみた。

「山村留学は過疎対策の良薬となります。だからといって安易に受入れることなく、その目的は、子供の教育にあることを忘れないでいきたいと思います。また、子供を行かせただけでなく、親や地域の人と交流していく

ことがとても大切です」とある先生は言う。またダイダラボッチの先生は、

「この共同生活では、子供は冬でも6時におきて掃除、洗濯、食事の片付けもして登校していきます。でも最近では田舎の子供は何も家のことを手伝わず田畑へも出ていません。受け入れ側も私たちの教育目的や生活を理解し、一緒に苦労したり楽しみながら家族のように暮らしていけたらと思います」と語っています。

## これからメジャーな秘境より 足元の田舎を見直していきたい 早稲田大学探検部

若者たちの冒険好きや旅行好きを反映して、大学にはその種のクラブや同好会が沢山ある。中でも冒険野郎たちの拠点といわれるのが早稲田大学。冒険部、旅行研究会、カヌークラブ、秘境歩きの会など数々のクラブや同好会があり、ほぼ全世界の秘境地へ遠征している。

しかし、身近な国内というと、関心は薄いようだ。

探検部の何人かに集ってもらい、若者が求める旅、ふるさととは何か等について話し合ってもらった。

「秘境」が宣伝されてメジャーな観光地になる

——探検部の皆さんは、ふだんどのような活動をやっているんですか？

A まず最初に新歓合宿というのがあって、これは毎年、伊豆の神津島に渡ってオリエンテーリング等を行います。

他に春と秋にそれぞれ合宿があり、幾つかの班に分かれて登山やケイビング、川下り、ロッククライミング等を行います。

それ以外の、夏休みや春休みには、気の合



った仲間とチームを組んで主に海外へ遠征に行きますね。

——海外へは主にどういった地域へ出てるんでしよう？

A 国別でいうとタイ、中国、インドの順に多いかな。タイ北部の村やチベットにはほとんど毎年出ています。それとアフリカや南米中近東……。

——国内の活動としては、どういうことをやっているんですか？

B 西表島にいる幻の巨大ヤマネコを探しに行ったり、四万十川をボートで下ったり……。——地方に遠征に行った場合、過疎の地域の人々や生活に触れる機会もあると思うが……。

A それは当然ありますね。だけど我々がふだんよくいく地域、例えば北海道なら知床、山なら南アルプス、四国なら四万十川、沖縄なら西表島……。そういう所は今後もすごい観光地化されてる面もあるんですよ。そういった場所です。真の田舎的生活に触れるのは、かえって難しいんじゃないかな。

——西表島というとかすごい秘境、という感じがしますけど？

A いや、だから逆にその秘境というのが宣伝されて、観光地化されちゃってる。

B そう。俺も昨年、西表に行っただけ、ジヤングルの奥地の幻の滝つってのに登ったら、観光客が落としてたゴミだらけだった。

C 知床にしても同じだよ。俺が知床岬まで海岸沿いの断崖絶壁を歩いて行ったときに、ガイドブックには「岬まで50km、片道2泊3日、道なき道をたどる」ってあって、実際そ

の通りだったんだけど、いざ岬にたどりつくと季節外れだったのに他に何人も来てて。後で地元のラーメン屋のオヤジに「ひと夏に何人くらい岬まで行く人がいるんですか？」って聞いたら「800人」と言われて興奮ぎめだったもの。ラーメン屋の壁は有名人の色紙でいっぱいだったし。

D 海外でも、ガラパゴスにしてもキリマンジャロにしても日本人がワンサカいるしね。金さえ出せば簡単に極地に行ける時代だし、もう本物の秘境なんか無いよ。

B むしろ国内の何でもない山村や離島の方がかえって都会人の手垢にまみれてないんじゃないか。

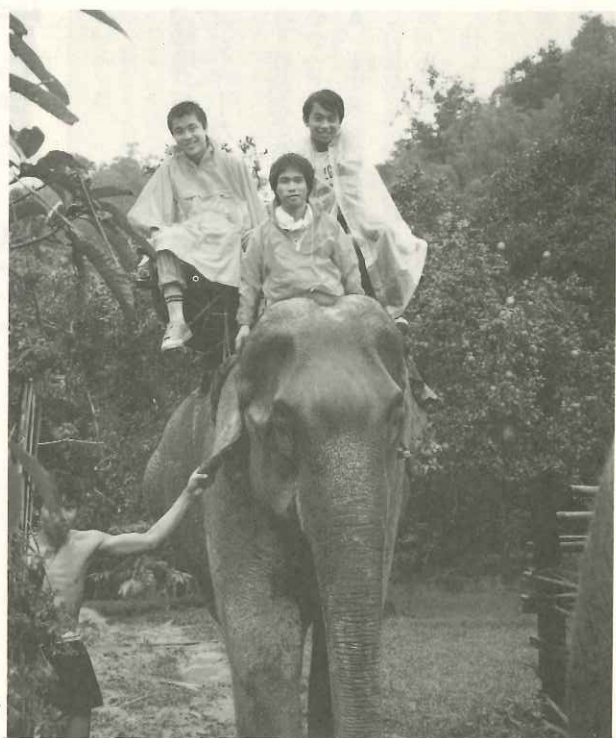
### 国内の地方への関心は薄い

——探検部のみなさんの「地方観」については。

C 俺は入部するまでは、探検部っていったら野性児みたいなモサガゴロゴロしてるってイメージがあっただけ、首都圏出身の坊っちゃんばいのが意外に多かったのぢやよとビックリした。むしろ都会で生まれ育った人間の方に自然や田舎に対するあこがれがあつて、それで探検部なんかに入って来るんだよね。

A うーん、だけど国内の事となるとどうなのかなあ……。みんな入部して一年の夏にはすぐに海外に出かけたがるし、タイの山岳少数民族とか、インドの山奥のムラなんかについてはやたら詳しくても、足元の日本国内の地方については、関心が薄いように思える。

C そう。同じ国内にしても、知床とか西表といった「メジャーな地方」にはいっぱい出



タイの山村を訪ねた探検部の学生たち、ゾウに乗って。

かけてるけど、普通の何もない田舎に好きこのんで行く人はあまりいないし。

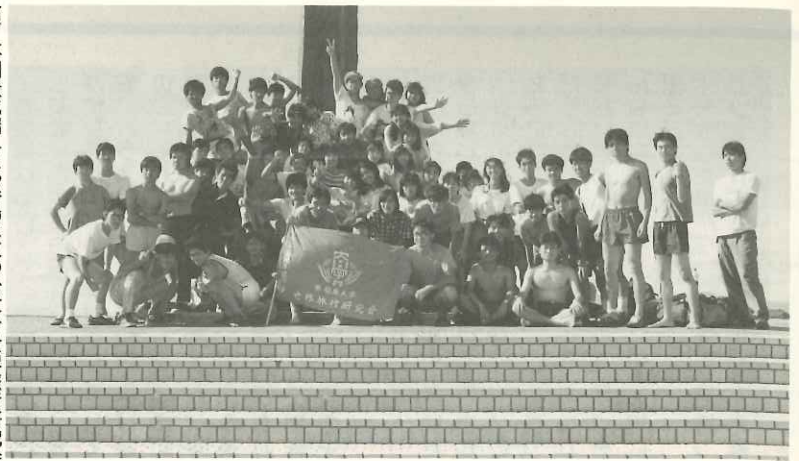
D ミツバチ族ってのがいるでしょ。毎年夏になるとバイクで北海道を回ってる、主に大学生。彼らは都会から北海道に来て、地元の人と交流したり漁師や牧場のバイトをやったりして喜んでるけど、北海道に行く途中の東北の村々なんかはほとんど見落とされてるね。ただ通過したっただけ。

C うん。沖縄に渡る途中にもトカラ列島とか奄美大島とか、いろんな島々があるのに、そこを見ようとしなくてまっすぐ沖縄、石垣、西表に行っちゃう。

B 特に最近、日本を飛び越していきなり海外へ行くっちゃうもんな。いまTVや新聞で



右／本州最北端、下北半島に立つ(早大・世界旅行研究会)  
左／関東周辺の山間部での山宿。



よくクルド難民の特集をやっているけど、国内に目を向ければアイヌや在日韓国人の問題なんかもある訳だしね。日本国内のことも知らずに世界を論じて、国際化の時代だってのも何か妙な気がする。アメリカやヨーロッパに留学して英語やフランス語をチョロツと話せるようになって、国際人をきどっているような人に限って「日本は単一民族国家だ」とかバカなことを言ったりする。

A 若いうちに広い世界を見ておいた方がいい、という考えが僕ら探検部員の中にはあるけど、その点は僕らにも少し反省の余地があるんじゃないか。

D そうだね。年間に何千万人も海外に出て、国際化が叫ばれている時代だからこそ逆に日本国内の地方や田舎を見直す時期に来ると言えるかもしれない。

C そのために何が必要かという点、山の中にホテルやホールなどを作ることよりも、何も無いが自然がたっぷりあって、我々が自由にキャンプできることも考えていってほしい。

B でも、ある村が自由に使っていないと無料のオートキャンプ場を開設したが、川原も山の中もゴミだらけだったという話もある。利用する人間のモラルという点、自然とのマナーがまだ日本人にはできていない場合が多い。我々も充分反省していきましょう。



## 農村の現場で働く気は？ 農大生たちにインタビュー

最近では畜産、園芸等の専門学を学びながら、一般企業へ就職する学生が増えている。学生は農村や現場の仕事はどう思っているのだろうか。

### ●安定した生活が保障されない

僕の先輩は大学を出たあと2年間アメリカで学び、香川の地元へ帰って花卉栽培をはじめた。しかし花だけでは食べていけないと養鶏やったり、冬はのり養殖を手伝ったりして結構苦労している。将来の夢はいろいろあるが、とりあえずは一般企業か役所に勤めて貯金をためる。そうしながら30歳までに農業を中心にした自立的生活をめざすつもり。(東京農大4年)

### ●獣医になるために努力を

夏休みに北海道や熊本などの酪農家へ手伝いにいき、獣医がどれほどみんなに頼りにされているかを実感した。僕も将来は獣医になりたいと思っているが、そのためにはあと5〜6年間みっちり勉強

する必要がある。受入れ側も、市町村や各組合が施設や教育機関を設けて若い人を育成し、給与面でも一般企業なみ(できればそれ以上)にしたいかないと。ゆとりをもつて農家や動物たちと接していきたいから。(日大獣医学部3年)

●専門性をいかしたい  
何となく農業に憧れて農大に入り、はじめて食物のこと、土壌のことなど学んだ。さて4年生になりリクルート活動をして、我々が学んできたり今後でできれば研究していきたい専門分野を生かせる場がほとんどないことに気づいた。田舎(秋田)に近いところの保健所を希望中です。

(東京農大4年女子)

# いまローカル線が面白い！ 窓を開けると、その土地の風、音、匂い、言葉……

(文／三浦聖春)

ローカル線の魅力は、何といつても窓が開くところだ。最近では、ローカル線でも冷房化された車両が増えてきて、窓を開けるのがはばかれることもあるが、まだまだ、地方のローカル線に乗れば、非冷房車が多数派だ。

窓を開けると、そこからは快い風とともに、さまざまな音や、匂いや、光が飛び込んでくる。風景ひとつにしても、ガラス窓一枚を取り払ったただけなのに、それはもうまったく違うものに変貌してしまう。あたかもそれは、キヤンバスに描かれた絵と、生命ある実体との違いでもあるかのようだ。これは、特急列車の厚い窓越しからは到底味わえない、ローカル線ならではのマジックなのだ。

潮の香り、緑の息吹、蟬時雨……。夏の車窓は、ひとり旅をする者にはたまらなく魅力的。線路沿いには、おじいちゃんに手を引かれた女の子が、こちらに向かってもう片つぼの手を振ったりしている。都会での疲れをすつかり洗い落としてくれる情景がある。そんな車窓を求めて、ほくはいつも旅に出る。

そうした車窓をいつも用意して待っていてくれるのが、多くのローカル線

たちなのだ。ボックス席の窓際に座り込んで、窓を目の高さまで開け、缶ビールを片手に、過ぎ行く景色をボンヤリと眺める。それはまさに至福の時。ここでは、車内の人々までもがどこか温かい。そして、これから訪れる町への期待が、ほくの胸を躍らせている。

## ●人間臭いディーゼルが好き

ディーゼーカーもいい。最近では、重厚な機関車に牽かれた客車列車が滅多に見られなくなつたのは淋しいが、それでもディーゼーカーは、電車と比べると、ひどく人間臭くて、そこが妙に愛らしいのだ。

登り坂に向かうときに、「へももも」とエンジン音を響かせて、ぶるぶるつと身を震わせて、「さあ登るぞ」と宣言して登りだす姿は、どこか中年のおじさんの頑張りを感じ起す。頑張っている割にはそれほどスピードは上がらず、よつこらしよ、といった感じで進んでいくのだが、それすらも何事もないように走つていく愛想なしの電車とは、比べものにならない愛しさのひとつなのだ。

そんなディーゼーカーの真骨頂は、真冬の雪景色の峠越えだろう。県境で、

疎らになつた乗客を乗せて、山深い一面の銀世界を黙々と走るディーゼーカー。険しい切り通しや、長い長いトンネル。ときどき響きわたる喘ぐような警笛。行く手が厳しければ厳しいほど、そこを切り拓いた先人たちの労苦が偲ばれる。そうした鉄路に籠められた思いを噛みしめるように走るディーゼーカーに乗っていると、思わず詩人の気分になつてしまう。

だから、ローカル線にはどうしてもディーゼーカーがよく似合う。それも最近活躍している軽量のレールバスタイプのものではなく、一見鈍重そうなおの赤い塗色に代表される旧式のディーゼーカーが。山間の駅で、あの姿を見たとき、なぜかほつとする気になるのは、決してほくばかりではないはずだ。

その雄姿は、まるで寡黙な職人のように、面構えまでが自信ありげなのだ。

## ●がんばれ、ローカル線！

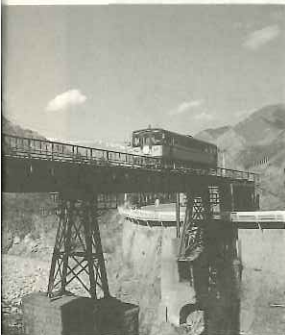
ローカル線の未来は、あまり明るいものではない。国鉄解体の風のなか、怒濤の如く荒れ狂つた「特定地方交通線」―赤字ローカル線つぶしには一応の終止符が打たれたものの、これで残



青空と白い車体が美しい。(ちほく高原鉄道)

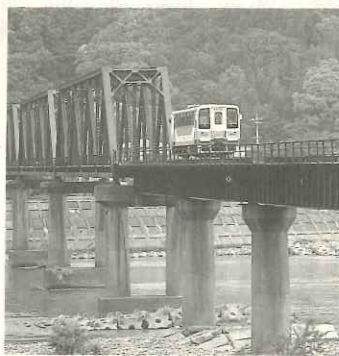


若者に人気の「ふるさと銀河線」終点、足寄駅。



―わたらせ溪流鉄道。





天竜川を渡る一両電車は何とも愛らしい。森駅の名物おばちゃん土産。



茶畑の中を行く天竜浜名湖線。

された路線がすべて安泰となったわけではもちろんない。

中小の私鉄の中には、存続の危ぶまれているもの、また、最近廃止になつてしまつたものもある。第三セクターとなつてとりあえず生き延びた路線も、JRグループとして崖っぷちで残された路線も、いつまた危機が訪れるか分からない。

モータリゼーションの時代に、新幹線や大都市の鉄道はともかく、ローカル線などは不要だと言う人もいるかもしれない。たしかに、今ではローカル線に乗つていて、見かける乗客のほとんどは、高校生までの学生と、老人たちだ。だが、逆にいえば、その乗客たちにとつて、鉄道はなくてはならないものはずだ。それに、クルマばかりの世の中が住みよいものだと、どうしても思えない。ほくにとつてクルマは、人を道路の片隅に追いやつていくゆゆしき存在なのだ。

「効率化」の名の下、ローカル線の列車は編成がどんどん短くなつていき、今では一両きりの単行列車が珍しくなくなつてしまつた。ワンマンカーが多くなり、無人駅も増えてきている。それはたしかに合理的かもしれないが、鉄道から潤いが少なくなつてきていることは否めない。国鉄時代がすべて良かったとはいわないが、かつて鉄道は町のシンボルであり、さまざまなコミュニティの場でもあつたはずなのだ。

### ●この町にも新しい生きかがある

ローカル線の、いわゆる過疎の町の駅舎はどこか心細げだ。そこが観光地でもなく、町の中心をほんの少し外れていたりすれば、改札を出てしばらく、行き場を失つて佇んでしまうようなことも少なくない。

そんな小さな町の駅前では、タクシーの客待ちが何台かいる程度で、たいがいひっそりしている。そして、しばらくほんやりしているうちに、単行のディーゼルカーは発車し、つぎの列車の発車時刻までは一時間以上はある。

そこで、ともかく、初めて訪れたその町を、どこへ行くともなく歩き始める。小さな社や、ちよつと洒落た横道や、何を讀んだとも知らない小さな碑などを見かけると、ふと立ち止まつてしばし眺める。それは、ローカル線の旅になくはないスパイスだ。

どんな町にも、必ず新しい発見がある。ほくがローカル線の旅をやめられないのも、そんなところに原因がある。そうした小さな想い出を心の中で転がしながら、次の町まで列車に揺られる窓から入ってくる緑色の風、たわわに実つた稲の穂が黄金色のカーペットとなつて車窓に新たな彩りを添える。

ローカル線あつての鉄道である。電化や冷房化などの近代化は時代の必然だが、せめて、いつまでも同じ景色の中を走り続けていてほしい、というのが、今のほくの願いなのだ。



能登九九湾観光に、小湊駅。



近代的な駅舎になつた天橋立駅。



足尾の山々をぬつて

# EVENT

(10月~12月)



## 味覚の秋まつり

完熟度100%の果物、お日さまをいっぱい浴びて育った野菜たち、香り高いお米や豆などの穀物、それに新鮮なお魚や手作り漬物など、秋は待ちに待った味覚の祭典。リュックサックを背負ってぜひお出かけください。

(電話は各市町村役場の代表番号であるため、お問い合わせの際は課、部名を告げてください。)

### (北海道)

#### ●ふるさと産業祭り(木古内町)

北海道の大地が育てたじゃがいも、玉ねぎ新米などを一堂に、行事もいろいろ。10月下旬。問い合わせ☎01392(2)3131木古内町役場 商工労働課

#### ●秋の味覚ともみじまつり(松前町)

及部川の紅葉を背景に食欲ともみじ鑑賞の祭り、お土産も多数。10月上旬

旬。問い合わせ☎01394(2)726松前観光協会

#### ●カントリー・フェスティバル(福島町)

新鮮な農産物と北海道の水産物を産直特価でどうぞ。鮭のつかみどり等各种イベントも。10月下旬。問い合わせ☎01394(7)3001役場 水産商工課

#### ●秋味まつり(増毛町)

鮭の地引網の他、魚やきのこなどの秋味鍋をご賞味。10月上旬。問い合わせ☎016645(3)1111役場 産業課

#### ●十勝港毛がに祭り(広尾町)

毛がに弁当、鉄砲汁、大釜ゆで毛がになどを各種用意し原価で販売。抽選会などもあり。12月第一日曜日。問い合わせ☎01558(2)2111毛がにまつり実行委員会

### (東北)

#### ●栗駒町産業まつり(宮城県栗駒町)

地場産品を一堂に集めて展示即売。とくに高原野菜、イワナ、ヤマメの青空焼きが人気。10月最終土曜日。問い合わせ☎0228(45)2111役場商工観光課

#### ●紅葉まつり(秋田県森吉町)

太平湖ふもとで特産品即売の他、イワナ塩焼き、ナメコ汁無料サービス等。10月10日、10月最終日曜日。問い合わせ☎0186(76)2334観光協会

## 北海道から秋のふるさと産直便

### ●ホクホクじゃがいも (男爵いも、メークイン)

北海道のじゃがいもは、ゆでてそのまま食べてもおいしい料理に使ってもとてもおいしい。価格は箱詰の重さやその年の市場価格によって多少の変更がありますが、1000円から3000円(送料別)。送料が10kg1000円程度です。詳しくは各市町村の農業協同組合へ。代金は先払い、後払い等ありますので、まず電話してみてください。じゃがいも産直便を行っている主な市町村の農協は以下の通りです。

### ●ラーメン

北海道の大地が育てた香りの高い小麦粉を使って作り上げた麺類。おなじみのラーメンから、うどん、そばなどいろいろ。バターやよもぎ、しそ、牛乳等を加えたひと味変わったものも売られています。

自然乾燥ラーメン・士別市☎01652(3)0121/玉子入りラーメン。栗山町☎01237(2)1272/三色そば・美瑛町☎01666(2)1066/屯田三色めん・剣淵町☎01653(4)2415/しも川手延めん・下川町☎01655(4)2134/おといねっぶそば・音威子府村☎01656(5)3035/エゾウコギめん・生田原町☎01584(5)221/流水ラーメン(乾燥)・興部町☎01588(2)2069/ちほくうどん・音更町☎01554(2)3935/鹿追そば・鹿追町☎01566(5)2107/乾めん・新得町☎01566(4)5213/つるりうどん・池田町☎0157(72)2165

### ●長いも

北海道の火山灰性土壌と気候は良品の長いも生産に適しています。白い雪の肌とアクのないさわやかな味が人気です。11月、12月(2月頃も可)。

大野町☎0138(77)8331/由

### ●ナメコ祭り(秋田県矢島町)

花立牧場を会場に、鳥海山麓で採れたナメコを即売。ナメコ汁を試食しながら郷土芸能を楽しむイベントも。10月第三日曜日。問い合わせ☎018

### ●産業祭(秋田県東成瀬村)

味覚の秋の特産品、園芸品などの即売会の他に料理講習、おてん市など。10月下旬日曜日。問い合わせ☎018



お日さまを浴びて育った  
新鮮野菜・果物がいっぱい!

- 2(47)2111役場産業課
- 田老鮭ツアール(岩手県田老町) 鮭のつかみどり(12月)と見学会、即売会。11月1月下旬。問い合わせ☎0193(87)2050鮭ツアール実行委員会
- 農業祭(岩手県浄法寺町) とれたての農産物の品評会、うるし工芸品展示即売会。11月11、2日。問い合わせ☎0195(38)2211役場農林課
- 鱈まつり(青森県脇野沢村) タラを使った郷土料理と即売会。12月1日。問い合わせ☎0175(44)2111役場振興課
- (関東)
  - ふるさと祭り(栃木県馬頭町) 秋の果実、山菜、野菜などの展示即売会をはじめイベント多数。10月第一土曜日。問い合わせ☎0287(92)1111役場産業課
  - ふるさと祭り(群馬県上野村) 農村物産、特産品などふるさとの香りいっぱい即売会その他。10月最終土曜日。問い合わせ☎0274(59)2111役場総務課
- (北陸)
  - 産業まつり(新潟県山古志村) 農産物即売会とイベント。11月3日。問い合わせ☎0258(59)2330役場産業課
  - 秋の味覚まつり(新潟県上川村) 秋の農産物、新米などの即売会、他家族が楽しめるゲーム、イベントなどがいっぱい。10月中旬。問い合わせ☎02549(5)2211観光協会
  - エビ・カニ祭り(新潟県阿津市) 獲れたてのエビ、カニの即売と料理大会。期間中は民宿でエビ、カニ料理が宿泊代を含め5000円から満喫できる。10月1日～11月30日。問い合わせ☎02592(7)2111役場産業課
  - 荒川峡さのこまつり(新潟県関川村) さのこ狩りを楽しんだあと旅館でさのこ料理を賞味する。10月上旬日曜日。問い合わせ☎0254(64)1441観光協会
  - 大崎ソバの会(新潟県羽茂町) 手打ちのそばを食べながら文弥人形を鑑賞。11月中旬～12月中旬。問い合わせ☎0
- 奥秩父紅葉まつり(群馬県大滝村) さのこ、農産物の展示即売会と郷土芸能、パザールなど。10月20日から1カ月。問い合わせ☎0494(55)0101観光協会
- 産業観光まつり(埼玉県名栗村) 農産物、山菜、栗等の展示即売会他。11月3日。問い合わせ☎0429(79)1121役場産業課
- ふるさとまつり(埼玉県岡神村) 村の特産物の販売の他民俗芸能、歌謡ショー等。11月3日。問い合わせ☎0494(79)1122ふるさとまつり実行委員会

## 和牛肉即売会とバーベキュー



岩泉町短角牛まつり

- 短角牛まつり(岩手県岩泉町) 国産の美味しい牛肉をPRし普及するため年1回開かれる牛肉まつり。展示即売会、試食会と共に、南部牛追唄全国大会も開かれ、全国のノド自慢が技を競う。10月上旬。問い合わせ☎0194(22)2111岩泉町役場農政課
- 牛肉まつり(福島県三島町) 美坂高原を会場に牛肉料理を味わいながらモミジ狩りを楽しむ。10月上旬日曜日。問い合わせ☎0241(52)3405(社)ふるさと振興公社

- 259(88)3332ソバの会事務局
- 九頭竜紅葉まつり(福井県和泉村) 福井県の三天イベントとして定着しており、村内で生産された農林物産

大崎ソバの会



- 開田高原そば祭り(長野県開田村) 名物のそば食い競争や農産物の直売、地酒やワインの試飲コーナー。民俗芸能も披露。10月下旬日曜日。問い合わせ☎0264(42)3331観光協会
- 開田高原そば祭り(長野県開田村) 名物のそば食い競争や農産物の直売、地酒やワインの試飲コーナー。民俗芸能も披露。10月下旬日曜日。問い合わせ☎0264(42)3331観光協会
- 文化祭と農産物商売祭(山梨県富沢町) 町の秋の味覚と商工業用品などを一堂に集めて、町民の作品展示会等も併設。10月中旬土曜日。問い合わせ☎05566(6)2111教育委員会
- (中部)
  - ほうとう祭り(山梨県大和村) 天然のきのこや山菜を材料にしたほうとうを野外で食べ放題。10月第二日曜日。問い合わせ☎0553(48)2111天目山民宿組合

# EVENT



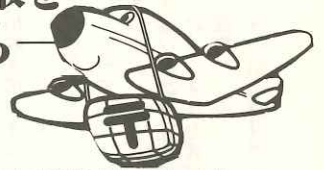
●どぶろく祭り(岐阜県白川村)  
 地場産の酒や山菜、農産物の即売、  
 試飲会。10月14日～19日。問い合わせ  
 ☎05769(6)1013 観光協会

●伊勢エビ祭り(静岡県南伊豆町)  
 9月20日から12月20日まで、民宿、  
 旅館で取りたての伊勢エビを一匹ま  
 るごとサービス。一泊7800～1  
 万5000円。問い合わせ☎0558  
 6(2)0141 観光課

●奥大井ふるさとまつり(静岡県本川  
 根町)  
 ヘリコプターによる遊覧飛行、奥大  
 井赤石太鼓上演、持寄品の青空市。  
 11月2～3日。問い合わせ☎0547  
 (59)3111 役場産業観光課

●はるの産業まつり(静岡県春野町)  
 農林物産、工業製品を格安で販売す  
 る町最大のイベント。山菜に人気あ  
 り。11月第三土・日曜日。問い合わせ  
 ☎05398(89)1111 役場経済  
 課

●村民まつり(静岡県龍山村)  
 産業まつり、文化祭を併せて実施。  
 木工品などの特産品の即売、展示発  
 表に人気。11月上旬。問い合わせ☎0



## ふるさと情報を 郵便局から

郵便局からの「ふるさと宅配便」や「ゆうパック」  
 は、各地の新鮮な産直品が早く手軽に届けられる  
 ことで人気がありますが、郵政省ではさらに、市  
 町村と連携して、過疎地域のニュースを都会へ紹  
 介する「ふるさと情報提供サービス」事業を実施  
 することになりました。

この事業は、地方と都会との交流を促進し、過  
 疎地域の振興をはかっていくことがねらいで、市  
 町村を中心にした地元関係者で推進協議会をつく  
 って情報誌を編集、10月上旬からスタートします。

情報誌の主な内容は、①同窓会や地元出身者の  
 近況報告、郷土の伝統文化や人、文化に関する情  
 報、②レジャー・宿泊施設の利用案内情報やイベ  
 ント情報、③地域特産品など地場産業情報など。

定期購読を希望する会員を全国の郵便局が受け  
 付け、郵送する仕組みで、いわゆる「ふるさと宅  
 配便」の情報版です。

このふるさと情報提供サービス事業に参加する  
 市町村は次の通りです。

北海道木古内町・同風連町・同余市町、岩手県  
 田野畑村・山形県小国町、群馬県上野村、山梨県  
 大泉村・同蔵沢町、長野県生坂村・同四賀村、岐  
 阜県八幡町、石川県内浦町、福井県名田庄村、兵  
 庫県夢前町、広島県大崎町、島根県赤来町、愛媛  
 県城川町、福岡県豊前市、宮崎県五ヶ瀬町、鹿児  
 島県垂水市、沖縄県那覇市の21市町村。

お問い合わせは  
 お近くの郵便局へ。



539(69)0311 役場企画室

●フェスタ佐久間(静岡県佐久間町)  
 町内商店による地場産品の販売と運  
 動会やイベント大会などをにぎやか  
 に。11月3、4日。問い合わせ☎05  
 39(65)0325 町商工会

●水産産業祭&文化祭(静岡県水窪町)  
 特産品、農産物の即売会と文化祭を  
 併催。11月3日。問い合わせ☎053  
 9(87)1101 商工会、役場教育委  
 員会

●産業祭(静岡県土肥町)  
 町内農産品、魚類の直売、もちつ  
 き大会。12月第二日曜日。問い合わせ  
 ☎05589(98)1111 役場産業  
 観光課

●茶臼山高原まつり(愛知県豊根村)  
 毎年春、秋の連休に一週間開催され  
 る農産物即売、試食会。10月7～11  
 日。問い合わせ☎05368(5)13  
 11 役場観光課

11 役場観光課

### (関西)

●粟まつり(京都府和知町)  
 粟ひろい、和知牛のバーベキュー等  
 の催し。10月12日、料金大人400  
 0円。問い合わせ☎07718(4)0  
 200 役場産業振興課

●ちりめん即売会(京都府丹後町)  
 丹後の特産品ちりめんの新作発表即  
 売会他。10月中旬日曜日。問い合わせ  
 ☎0772(75)0437 商工会青年  
 部

●秋祭り(奈良県野迫川村)  
 北今西地区の氏子の秋祭り、温泉  
 客も参加してみこしや餅まきでにぎ  
 わう。11月3日。問い合わせ☎074  
 73(8)0011 野迫川温泉ホテル  
 のせ川

●産業まつり(和歌山県美山村)  
 10月～11月。問い合わせ☎0738  
 (56)0321 役場産業課

●産業まつり(和歌山県清水町)

青空市場、物産展、大餅投、観光写  
 真展など毎年変化をもたせて。11月  
 中旬の日曜日。問い合わせ☎0737  
 (25)1111 役場産業課

●農産物品評会(和歌山県熊野川町)  
 町でとれた農産物、山菜の展示即売  
 品評会。11月～12月の間の日曜日。  
 問い合わせ☎07354(4)0723  
 町公民館

### (中国・四国)

●りんご祭り(岡山県佐伯町)  
 りんご狩り、りんご娘の撮影会、カ  
 ラオケ大会等のイベント。9月中旬  
 ～10月上旬日曜日。問い合わせ☎08  
 69(88)1101 観光協会

●ふるさと祭り(岡山県川上町)  
 特産品、農産物、民芸品の直売会。  
 10月下旬の3日間。問い合わせ☎08  
 66(48)2200 役場経済課

●若桜ふれあい祭り(鳥取県若桜町)  
 農業、林業、商工業品の展示即売会



と各種団体が創意工夫をこらした催し物。11月初旬の3日間。問い合わせ☎0858(82)1111観光協会

●ふるさと祭り(島根県仁多町)

郷土芸能、踊り、地元産品の展示即売会など催し多彩。11月第二土・日曜日。問い合わせ☎08545(4)1221祭り実行委員会

●ふるさと祭り(島根県掛合町)

駅伝競争、運動会、郷土芸能披露に農産物品評会、チャリティショウなど。11月初旬の2日間。問い合わせ☎08546(2)0300まつり実行委員会

●産業祭(島根県川本町)

特産品フェアと即売会、餅つき大会。全日本レディス綱引大会が人気。11月3日。問い合わせ☎08557(2)0631産業祭事務局

●城下町津和野は酒どころ(島根県津和野町)

名物酒蔵鍋を味わい、津和野の名酒を飲み放題。翌日は酒蔵を見学。11月25、12月10日。問い合わせ☎08567(2)1144観光案内所

●ふれあい祭り(山口県東和町)

パザール、演芸、福祉の市など手づくり品と人々の交流をメインに。11月3、4日。問い合わせ☎08207(8)1110教育委員会

●ふるさと祭り(山口県美川町・美和町)

産業物や商工業品の展示即売会の他文化祭、各種展示会、イベント多彩。美川町は11月上旬の土・日曜日☎08277(6)0211。美和町は11

月8、9日☎08279(6)1111  
1 役場教育委員会、産業課。  
●観光物産展示即売会(山口県徳地町)  
広島市のそごう百貨店で開催。新鮮な特産品を毎朝運びこみ一週間展示即売。11月。問い合わせ☎083355(2)1112役場商工観光係

●ふるさとまつり(山口県川上村)

農産物の収穫を終えて、芸能、鮎のつかみどり等を村民が一日楽しむ。11月第一日曜日。問い合わせ☎083854(2)2121まつり実行委員

●産業文化祭(徳島県上那賀町)

産業の部、文化の部、高校の部に分かれて各種イベントを行なう。問い合わせ☎08846(6)0111役場農林課

●金清温泉白鳥まつり(徳島県市場町)

青空市場、カラオケ大会、写生大会など。11月12月1日。問い合わせ☎0883(36)5111役場産業課

●早飯食い(高知県土佐山村)

白飯に白湯をかけ、焼ミソを椿の葉

北海道から

ふるさと産直便

●昆布・とろろ昆布

冬のナベ料理やおせち料理に欠かせない昆布はやっばり北の海産がいちばん。平均1kg当たり2000円〜2500円(送料別)。申し込み期間の制限はありませんが、お歳暮シーズンの前の方が安心です。

その他、北海道特産のはたて貝、貝柱、ウニ、カキ、カニなどがあります。昆布関係は次のとおり。

- りしり昆布・とろろ昆布・利尻町 ☎01638(4)2345 / 日高こんぶ・静内町 ☎0146(48)2506 / 日高こんぶ・えりも町 ☎01466(2)2241 / ミニ昆布金鈴とろろ・浜中町 ☎0153(62)2516 / 手造りおぼろ昆布・浜中町 ☎0153(62)2111

●牛肉・とり肉・ハム

広大な北海道の牧場や草原で育てた

牛や豚肉は豊潤な味が自慢。添加物も少なく安全面でも信頼される製品です。手作りの味をどうぞ。

- ダイセツアンガス牛肉・上川町 ☎01658(2)1112 / きじのくん製・新十津川町 ☎0125(74)2218 / 羽幌ダックF4・羽幌町 ☎0166(62)2141 / ささみのくん製・清水町 ☎0156(62)2111 / サフオーク・ラム・士別市 ☎01652(3)3121 / けねべつサフオーク・中標津町 ☎01537(8)2111 / スモークドタンビーフ・八雲町 ☎0137(63)4129 / スプアサカム(牛肉)・瀬棚町 ☎01378(7)2070 / 手造りハム&ソーセージ・ニセコ町 ☎0136(58)3162 / 七面鳥くん製・奈井江町 ☎01256(5)2151 / 暑寒ジンギスカン・雨竜町 ☎01225(77)2331 / スモークドチキン・寒どりハム・幌加内町 ☎0165(35)2073 / スモークドチキン・剣淵町 ☎0165(3)3569 / 手造りハム・ビーフジャーキー・遠別町 ☎01632(7)2332 / スモークビーフ・幌延町 ☎0

●バター&チーズ

新鮮な牛乳をたっぷり使ったバターやチーズ。各町の清潔な酪農工場で誠心こめてつくったおいしくて香りにあふれた乳製品です。

- ひがしもことゴードチーズ&カマンベール・東藻琴村 ☎0152(66)3953 / 木樽バター・興部町 ☎0158(82)2131 / クリームチーズ&カマンベール・士幌町 ☎01564(5)3121 / 無塩バター・士幌町 ☎0156(45)3121 / 別海カッタージクリムチーズ&バター・別海町 ☎01537(5)2160 / ふらのチーズ・富良野市 ☎0167(23)1156 / ゴードチーズ・中標津町 ☎01537(2)3281



に盛ったオカズで10数人が一挙に食べる行事。11月8日。問い合わせ☎0888(95)2311教育委員会。

### ●謝恩祭(高知県大川村)

特産品を使ったパーベキュー、鍋大会。1人4500円。11月3日。問い合わせ☎0887(84)2211ふるさとむら公社。

### ●秋まつり(愛媛県小田町)

各地区を巡回して行われる収穫祭。夜店やみこしも出て秋祭りの気分いっぱい。10月15～29日。問い合わせ☎08925(2)3111役場産業課

### ●ふる里物産市(愛媛県広見町)

もみまき、郷土料理試食会、せんべいの実演などの他に特産品販売。11月第三日曜日。問い合わせ☎08954(5)1111役場商工係

### ●奈良川いもたき(愛媛県広見町)

川原で里いもの鍋を囲み、川ガニ料理に舌鼓。予約が必要。8月中旬～11月初旬。問い合わせ☎08954(5)0813商工会

### ●ふる里の味交流市(愛媛県松野町)

文化祭に併せて特産品、加工品、木工品等の展示即売会。11月3日。問い合わせ☎08954(2)1111役場農林課

### (九州)

### ●有川商工まつり(長崎県有川町)

町のシンボル鯨の汐吹き、神楽ではじまり、特産品直売会。10月中旬日曜日。問い合わせ☎0954(42)0037

### ●農業祭(熊本県七城町)

名物さつまいもをはじめ農産物の展示即売会他。10月の休日。問い合わせ☎09682(5)2148農協。

### ●しょうが祭り(熊本県東陽村)

生しょうが、加工しょうが等の展示即売会。アトラクションもいろいろ。10月中旬土曜日。問い合わせ☎0

## にいがた ふるさとふれあいツアーに参加しませんか

いま越後の村々は美しい紅葉と収穫期を迎え新鮮な旬の味でいっぱい。新潟県の「にいがたの農山村と都市の交流事業実行委員会」が企画主催する「ふるさとふれあいツアー」は、ふるさとの自然や人々と交流し、秋の味覚や自然と親しむためのユニークなツアーです。11コースの中からお好みのものをどうぞ。各コース共昼食、土産付/



- 黒川コース(10月10日) ← 募集人員45名、大人6,900円、子供6,400円。集合/7:30新潟駅万代口東急イン前。イモ掘り、魚釣り、ソーセージ作り他。
- 上川コース(10月15日) 募集人員50名、大人4,000円、子供3,500円。集合/津川駅9:00。缶詰作り、もちつき体験のあと郷土芸能や室谷洞窟等を見学。
- 栃尾コース(10月13日～15日) 募集人員45名。大人8,400円、子供6,700円。集合/新潟県万代口東急イン前8:10。民話の里でてまり製作、ジャンボ油揚げ他。味覚体験。
- 小木コース(10月16日～17日) 募集人員25名。大人14,000円、子供12,200円。集合/新潟港佐渡行船待合室8:45。佐渡ヶ島で海の幸を味わいお祭りに参加する。
- 牧コース(10月25日～27日) 募集人員25名。大人15,400円、子供12,400円。集合/高田駅前10:45。そば打ち、きのこ狩り、もちつき体験他。
- 入広瀬コース(10月27日)
- 松代コース(10月27日) 募集人員50名。大人5,700円、子供5,500円。集合/直江津駅9:10。きのこ狩り体験のあとゲーム大会、さといも大根掘り他。
- 柏崎コース(11月10日) 募集人員45名。大人9,900円、子供8,700円。集合/新潟県8:00。本村幸道美術館を見学、午後はきのこ狩り他。
- 村上コース(11月23日) 募集人員40名。大人8,900円、子供8,900円。集合/村上駅9:00。イヨボヤ会館、サーモンパーク等を見学。伝統の鮭料理を体験。
- 吉川コース(11月18～19日、1泊2日) 募集人員30名、大人11,500円、子供9,700円。集合/新潟駅14:10。柿崎インター-15:53。もちつき、そばづくり、とうふづくり等を体験。宿泊はスカイトピア遊ランド。

●お問い合わせ、お申し込みは ———  
にいがたの農山村と都市の交流事業実行委員会 ☎025-285-5511 ㊟2415 県企画調整部

### ●かほくまつり(熊本県鹿北町)

965(65)2111役場産業課  
農林産物の即売、各種団体による発表会。イベントと併せて。11月第三土曜日。問い合わせ☎09683(2)3111役場経済課

### ●尾平もみじ祭り(大分県緒方町)

祖母山麓の紅葉を楽しみながら郷土料理を味わい特産品を販売。11月第一日曜日。問い合わせ☎09744(2)2111役場産業課

### ●ふるさと祭り(大分県大洞町)

郷土芸能、農林物産展他。11月第三日曜日。問い合わせ☎0975(78)1111役場産業課

### ●ふるさとまつり(大分県秋町)

物産物の展示即売、郷土芸能の集い。11月23～24日。問い合わせ☎0974(68)2211役場産業課

### ●産業祭(宮崎北郷町)

農林・水産物を即売する他芸能大会、ジャンボ抽選会など。11月下旬の土日曜日。問い合わせ☎0987(55)2111役場農政課

### ●村民祭(宮崎県西郷村)

農林産物の即売とスポーツ、文化行事。夜は田代神社の秋祭り。11月22～23日。問い合わせ☎0982(66)3111役場総務課





# ふるさとに伝わる伝統 郷土芸能祭典

## 芸能&新イベント

村々は秋の収穫が終ると五穀豊穡に感謝する祭りのにぎわいます。何百年という伝統を受けつぐ貴重な神楽や獅子舞いに加えて、新しいユニークな祭りもいろいろ。笛太鼓と夜店のならぶふるさとの祭りは、いくつになってもなつかしく心踊ります。酒をくみ交しに出かけませんか。

●中里盤持大会(北海道山町)  
冬の農閑期に青年が集まり力試しに米俵をかっついで競い合ったのが始まりで昭和5年から続いている。11月  
問い合わせ☎01237(2)0886  
中里盤持保存会

●もせうしごね太鼓(北海道妹背牛町)  
オリジナル曲を中心とした勇壮な太鼓のひびきが魅了する。11月。問い  
合せ☎01643(2)2411役場  
教育委員会

●水分神社祭典(宮城県七ヶ宿町)  
430年の歴史を持つ鎮守、豊作を祝う水分神社の祭り。おみこし行列とやぶさめが行われる。問い合せ☎0224(37)2111役場建設観光課

●標名神社の太々神楽(群馬県倉淵村)  
大正6年氏子よつてはじめられたもので、神楽が奉納される。問い合せ☎0273(78)3111役場観光係

●おこわ握り「にぎりっくら」(群馬県片品村)  
赤飯をみんなで競って握り合い、それが幸福をにぎることを意味するお祭り。11月3日。問い合せ☎0278(58)2111役場教育委員会

●有氏神社盤台行事(埼玉県神泉村)  
埼玉県指定無形民俗に指定されているもので、獅子舞い、神楽などが演じられる。11月19日。問い合せ☎0274(52)3271役場総務課

●佐渡菊花展(新潟県佐渡・真野町)  
佐渡の秋の名物行事の一つになっている菊花展。島内の自慢の菊鉢が参加、菊人形も登場する。11月3日、6日。問い合せ☎0259(55)31

●妻籠宿文化文政風俗絵巻の行列(長野県南木曾町)  
木曾妻籠宿に伝わる江戸時代の旅人の風俗を再現し町内を行列する。農産物、特産品などの即売もあり。11月23日。問い合せ☎0264(57)3123妻籠宿観光案内所

●聖高原ロードレース(長野県麻績村)  
一般一部20km、一般二部及び高校の部10km、中学生及び女子全般の部6kmの日本陸上競技連盟公認レース。紅葉する聖高原の美しさを満喫。11月。問い合せ☎0263(67)3001役場教育委員会

●鎌倉踊り(岐阜県春日村)  
部落の神社や寺院に奉納して、氏子の繁栄繁昌、五穀豊じようを祈る祭り。問い合せ☎0585(57)26008寺本鎌倉踊保存会

●高賀神社大祭(岐阜県洞戸村)  
笛太鼓の囃子が出て終日にぎわう。問い合せ☎05815(8)8551役場

●霜月祭(長野県上村)  
南信州遠山郷に伝わる国重要文化財で、村内4カ所て日を替えながら行われる。熱湯をたぎらせながら神事が夜通し続く。12月11日、1月4日。問い合せ☎0260(36)2211役場観光係

●秋葉の火まつり(静岡県春野町)  
火の神として知られる秋葉神社のお火の舞は今年最大のイベント。秘伝の弓、剣、火の三舞の神事が古式豊かに繰り上げられる。12月15、16日。16日夜半は防火祭。問い合せ☎05398(5)0005秋葉山本宮秋葉神社

●鳳来寺山もみじまつり(愛知県鳳来町)  
紅葉を楽しみながら町民による芸能大会、農産物市に集う。11月1日、30日。問い合せ☎05363(2)0222観光協会

●参候祭(愛知県設楽町)  
愛知県無形文化財。11月中旬土曜日。問い合せ☎05366(2)0511観光協会

●花まつり(愛知県東栄町)  
国重要無形民俗文化財。鬼の面をつけて笛太鼓に合せて舞う伝統芸能。11月中旬の土日曜日からはじまり1月まで町内11カ所て夜を徹して行われる。問い合せ☎05367(6)0501観光協会

●11役場商工観光課

●妻籠宿文化文政風俗絵巻の行列(長野県南木曾町)

●山住神社の大祭(静岡県水窪町)

●山住神社の大祭(静岡県水窪町)

●山住神社の大祭(静岡県水窪町)

●山住神社の大祭(静岡県水窪町)

●山住神社の大祭(静岡県水窪町)

●山住神社の大祭(静岡県水窪町)

●山住神社の大祭(静岡県水窪町)

●山住神社の大祭(静岡県水窪町)

●山住神社の大祭(静岡県水窪町)

●山住神社の大祭(静岡県水窪町)

●山住神社の大祭(静岡県水窪町)

●山住神社の大祭(静岡県水窪町)

●山住神社の大祭(静岡県水窪町)

●山住神社の大祭(静岡県水窪町)

●山住神社の大祭(静岡県水窪町)

●山住神社の大祭(静岡県水窪町)

●山住神社の大祭(静岡県水窪町)

●山住神社の大祭(静岡県水窪町)

### ●下部神社太鼓踊(奈良県都祁村)

吐山に古くから伝わる民俗芸能で、雨乞いと豊作を祈願して奉納される県重要無形文化財。11月23日。問い合わせ☎07438(2)0201役場企画課

### ●寒川神社祭(和歌山県美山村)

神楽を奉納、境内には市が立ってにぎわう。和歌山県無形文化財。問い合わせ☎0738(56)0321役場教育委員会

### ●野中の獅子舞(和歌山県中辺路町)

近露の近野神社へ奉納する獅子舞で11月3日と正月の1月3日に行われる。問い合わせ☎0739(65)0003役場近野支所

### ●上野の獅子舞(和歌山県大塔村)

春日神社に伝わる五穀豊穰を祈願する県無形文化財指定の獅子舞。11月3日。問い合わせ☎0739(48)0301大塔公民館

### ●ねんねこ祭り(和歌山県古座町)

神功皇后の故事により子守りの神様を祀る行事。女子供が集まり早朝から。12月1日。問い合わせ☎0735(72)0645古座川観光協会

### ●奥飯石神楽(島根県頓原町)

奥飯石神社に奉納される秋の収穫祭で神楽は島根県無形文化財。問い合わせ☎0854(72)0311観光協会

### ●全日本レディース綱引大会(島根県川本町)

1チーム10人、体重制限なしの女性力持ち競技。優勝賞金10万円他賞品も多数あり。問い合わせ☎08557(2)0631役場農林商工課

### ●鴨山駕籠かき大会(島根県邑智町)

万葉の歌人柿本人麻呂焉の地「鴨山」になんで命名した籠かき競争他。11月第三日曜日。問い合わせ☎085

### ●抜月神楽ノ石見神楽(島根県六日市町)

全国的にも知られる伝統ある神楽で、県無形文化財。十種以上の神楽があり長時間にわたって演じられる。11月2日。問い合わせ☎08567(8)0465抜月神楽園

### ●渡り拍子(岡山県成羽町)

各神社に花笠をつけた渡り拍子が道引きして、氏子を神が渡る。11月1日、30日。問い合わせ☎0866(42)3211観光協会

### ●各神社の秋祭り(岡山県川上町)

備中神楽や渡り拍子が町内各神社ごとに奉納される。11月1、30日までの土日曜日。問い合わせ☎0866(48)2200観光協会

### ●本郷頭打ち祭り(岡山県香多町)

子供28人による頭打ちや大人の獅子がでてにぎやかに氏子宅をまわる。11月19日。問い合わせ☎0867(96)2860本郷頭打保存会

### ●阿波八幡神社花祭り(岡山県阿波村)

8本の花車がぶつかり合って練り歩く勇壮な祭りで、一名「喧嘩祭り」ともいわれる県重要文化財。問い合わせ☎0868(46)2251花祭り保存会

### ●八幡神楽(広島県美土里町)

町内3カ所にある八幡神社に奉納する宮神楽で、江戸時代中期より伝承されている。6神楽団あり県無形民俗文化財。9月中旬、11月20日。問い合わせ☎08265(4)0311役場教育委員会

### ●市岡八幡神社神殿入(広島県大和町)

前夜には各集落を出発した神燈が行列となって神社へ登っていく。「神殿入」と呼ばれる神秘的行事。11月2日。

## 地方に伝わる伝統歌舞伎



### ●小鹿野の歌舞伎芝居(埼玉県小鹿野町)

秩父に江戸時代から伝わる歌舞伎を代々伝承してきたものでレベルが高いことでも定評がある。1月の郷土芸能祭に。12月14～15日発表会。問い合わせ☎0494(75)0063教育委員会

### ●村芝居「白雪・鳳凰座」(岐阜県下呂町)

険しい山々に囲まれた飛騨人の娯楽としてはじまった素人歌舞伎で、国指定の民俗文化財。毎年2軒の芝居小屋でにぎにぎしく開催される。11月2～3日。問い合わせ☎05762(7)1354村芝居・細江方  
なお下呂町では「竹原文楽」でも有名。1人で百体余りの人形を操る人形歌舞伎で全国でも類をみない文化遺産。12月15日。☎05762(5)2239竹原文楽・洞奥方

### ●大拍子(広島県高野町)

大拍子は花田植の田楽だが郷土芸能保存のため11月3日文化の日に披露。また10月19、11月15日まで「比婆斎庭神楽」を各地区の祭りに開催する。出雲神社に由来する古典的な神楽で県無形文化財指定。問い合わせ☎0824(86)2551教育委員会

### ●奴道中(山口県美川町)

7年に一回秋の例祭に演じられる古式豊かな例祭。11月1日。問い合わせ☎0827(7)0752保存会

### ●多賀神社秋祭り(山口県鹿野町)

毎年この日にお参りすると寿命が一年のびると言い伝えられる。11月11日。問い合わせ☎0834(68)2332役場経済課

### ●柏木岩戸王子の舞(山口県秋葉町)

柏木須賀社に伝わる神楽舞で、健康豊作、牛馬の安全を願って舞う。11月18日。問い合わせ☎08376(4)003保存会。さらに、秋芳町では

### ●八幡神社例祭(徳島県上那賀町)

奴が繰り出し練り歩く。平谷地区が11月3日、梅川地区が中旬土日曜日に。問い合わせ☎08846(6)0111役場農林課

### ●亥の子まつり(愛媛県小田町)

旧暦10月初亥(11月頃)の祭りで、子供達がモチをつけて各戸をまわる。問い合わせ☎0892(52)3111役場産業観光課

### ●観光風揚げ(愛媛県五十崎町)



高知県東津野村に伝わる古武神楽。  
左/山探しの舞、右/大笹の舞。



5月5日以降毎月第二日曜日に開催しており、135×165cmのけんか凧をかしてくれ揚げ方を教えてくれる。問い合わせ☎0893(44)2121観光協会

●五ツ鹿踊り(愛媛県広見町)  
東北の鹿踊りの流れをくみ哀調をおびた素朴な舞い。子供が演じる。県無形文化財。11月15日。問い合わせ☎0895(46)0406保存会

●秋祭り(愛媛県日吉村)

各地区で牛鬼、四つ太鼓、みこし、五鹿踊りなどが繰り出し、家々をまわる。11月10日。問い合わせ☎0895(44)2211役場教育委員会

●山北棒踊り他(高知県香我美町)

古くから伝わる郷土芸能の保存に力を入れていた町で、若一王子官の獅子舞いを11月8日、山北地区に伝わる棒踊りを11月18日披露する。共に県無形文化財指定。問い合わせ☎0887(55)3413、4727保存会

●大利の太刀踊り(高知県鏡村)

夏目漱石の「坊ちゃん」にも登場した新宮神社の太刀踊り。11月3日。問い合わせ☎0888(96)2358保存会

●おなばれ(高知県土佐山村)

子供、青年による棒使い、獅子舞い、基盤、挾節、相撲、刀、おみこし等がくり出す多彩な祭り。11月8日。問い合わせ☎0888(95)2311役場教育委員会

●津野山古武神楽(高知県東津野村)

紅葉の山々を背景に五穀豊穣に感謝して奉納される古典的な神楽で、国重要文化財。11月15、19日。問い合わせ☎0889(62)2311役場産業課

●仁井田神社大祭(高知県大正町)

花取り太刀踊り、牛魂、神楽などを奉納し、町内を練り歩く。11月25日。問い合わせ☎0880(27)0111役場産業課

●天しょう台登山大会(熊本県三角町)

九州自然歩道三角岳の中腹、天しょう台へ登山する行事で九州各地区から参加。記念品贈呈。11月3日。問い合わせ☎0964(53)1111

●金栗四三翁マラソン大会(熊本県三加和町)

日本マラソンの父金栗四三の偉徳をたたえ健脚づくりを推進するため毎年11月初旬に開催される。問い合わせ☎0968(34)3111教育委員会

●田浦阿蘇神社祭(熊本県田浦町)

相撲大会に加えてチビッ子大学、みこし、餅なげなどをぎやかに。11

# 初すべりスキー大会



日18、19日。問い合わせ☎0966(87)1111役場教育委員会

●阿蘇神社秋祭り(熊本県深田村)

古代からの伝統を受け継いだ「球磨神社」を火の神に奉納する国指定文化財。11月11日。問い合わせ☎0966(45)1133役場企画室

●標祭り(大分県豊後高田市)

900年の伝統を持つ日本三大裸祭

上旬までナイターレースを行い、毎週土曜日は一般参加者によるハンディキャップ制の競技大会を開催。初心者も優勝するチャンスあり。

●月山初すべり(山形県西川町)

11月3日から全国に先きかけて初すべりが楽しめる。問い合わせ☎0237(74)2111役場内月山朝日地区観光協会へ。

●茶臼山高原スキー場オープン(愛知県豊根村)

愛知県下で初めてスキー場がオープン。12月20日にオープン、各種イベントを計画。問い合わせ☎0536(87)2070茶臼山高原協会(豊根村大字坂宇場)

## 森の音楽会

●くりやま音楽祭(北海道栗山町)  
音楽好きの町。仲間達が一堂に会して「奏でよう、歌おう」をテーマに楽しむ音楽祭。11月23日。問い合わせ☎01237(2)1111役場教育委員会

●アッピレーシング・カップ(岩手県安代町)

安比高原スキー場でJRS登録者プロレーサーによるディアルレース、さらに愛好者を対象にしたジャイアント・スラム競技会を開催。開催日は12月。詳しくは☎0195(72)5111安比高原スキー場係へ。  
安代高原スキー場は12月末から4月

# EVENT

## DePOLA INFORMATION



- りて、若宮八幡秋の例祭。初日と三日目のみこしの川渡しが話題。11月23日。問い合わせ☎0978(22)3100 役場商工観光課
- 原尻の川越祭り(大分県緒方町) 裸の若者が松明の下、笛太鼓に合わせてみこしをかつぎ川を渡る。11月初旬。問い合わせ☎0974(42)2111 役場産業課
- 椎葉平家まつり(宮崎県椎葉村) 神楽、山法師踊、臼太鼓と民謡などの郷土芸能を披露する他各種イベントも。11月一週土日曜日☎0982(67)3111 役場産業課。なお11月中旬から12月下旬には各地区ごとに椎葉神楽を舞う「夜神楽」行事も。
- 夜神楽(宮崎県日之影町) 五穀豊穣を祝って夜を徹して舞う神楽。素朴な笛太鼓の音が幻想的。12月上旬から1月まで集落ごとに。問い合わせ☎0982(87)2111 観光協会
- 大汝牟遲神社大祭(鹿児島県吹上町)

### 今、過疎新時代—その大いなるポテンシャル 全国過疎問題シンポジウム

いま20世紀最後の10年を迎え、我が国では真の豊かさが実感できる社会づくりが急がれています。東京一極集中の是正とともに地方の活性化を図ることが喫緊の課題で、過疎地域においては、地域の自主的・主体的な努力と創意工夫による魅力ある地域づくりが求められています。

こうした状況の下、国土庁、兵庫県及び全国過疎地域活性化連盟の共催によるシンポジウムを開催、全国の様々な地域で魅力ある地域づくりに取り組む方々が一堂に会し、相互に刺激し合い連携を深めながら、過疎地域活性化のための有効な手だて等を検討してまいりたいと思います。

多数の方々のご参加をお願い申し上げます。

- 日時/10月29日(火) 全体会/兵庫県立文化体育館 10月30日(水) 分科会/同文化体育館、兵庫県民小劇場、兵庫県公館の3会場

- 10月29日(火) 8:30受付、9:30開会式。基調講演/東京大学教授大森彌。午後はパネルディスカッション他
- 10月30日(水) 9:00受付、10:00フォーラム開始。①第1分科会「都市と農山漁村の新しい交流システム」②第2分科会「い

- ま求められている地域クリエイター」③第3分科会「女性が元気な地域づくり」
- 会議参加費 1人3,000円
- 問い合わせ☎078-341-7711 ②2497~8 シンポジウム実行委員会事務局

島津日新公の加世田城攻略を祈願した祭り、狩りの衣裳の武者が馬上からの射つ勇壮なもの。11月23日。問い合わせ☎0992(96)3626 保存会

●民俗芸能神舞(鹿児島県入来町) 古代準人舞を伝承する準人神楽と中世渋谷入平院の演劇的要望素の入っ

たユニークな神楽。11月23日。問い合わせ☎0996(44)3460 保存会

●人形浄瑠璃(鹿児島県東郷町) 佐渡と東郷だけに伝えられるもので300余年の歴史を持つ。11月24日、町総合文化祭で上演。問い合わせ☎0996(42)0053 役場教育委員会

## 編集後記

▼南信濃の木沢小学校が今年4月に閉校した。学校裏手の茶畑で子供たちが茶をつんで香り高い「赤石茶」を作り、父母が手伝っていたのも出荷、校庭の池にはイワナやヤマメも棲むすばらしい小学校だっただけに閉校が残念でならない。都会に住む人の僅か1%が農山村へUターンするだけで過疎地の多くが救われるという。本誌がその足がかりとなればと思う(A)▼農村の嫁不足について、取材した山口県の山田さんは「豊富な話題を持ちもつと自信をもつとれば女は惚れる」と言った。ちなみに山田さんは神戸の銀行員だった女性を奥さんにした(K)▼私が体験入門した北海道中標津小林牧場のおばさんは「北海道を知りたい人ならマイナス何十度の冬において」とよく言った。農業、語学を学びに私はいまカナダに留学中。おばさんや別海へ嫁いだ女性のことを思い出しながら、私も厳しい冬を異国の地で頑張りたいと思っている(S)

## でほら

No.1 ('91秋冬号)

発行日/平成3年10月15日

発行所/全国過疎地域活性化連盟

〒100 東京都千代田区永田町1-11-35  
全国町村会館6階 ☎03(3580)3070代

編集 協力・印刷/株ぎょうせい

■協力/助地域活性化センター・  
助ふるさと情報センター

いま、ローカル線が面白い!



## 錦川清流線(山口県)



錦町で毎日曜日に開かれる「ふれあい広場」。町の特産品や手づくりの草もち、漬物などが並び「ヤッホー漬」が人気。

終点錦川駅はモダンな駅舎で、町ではさまざまな特産品づくり(ワサビ、コンニャク、漬物など)や若者向けのイベントが盛ん。沿線には桜が植えられ、春はお花見、秋は紅葉の名所になっている。



車体は錦町のシンボルカラーであるクリーム地に赤と青のライン。錦川沿いの風景は四季折々の旅情がいっぱい。地域を愛する人々の熱意により川も鉄道も健在だ。

# 夢言葉。

平成3年10月15日発行

発行／全国過疎地域活性化連盟

〒100 東京都千代田区永田町1-11-35 全国町村会館6階 ☎03(35880)3070代



もし宝くじに当たったら、その瞬間、人はどんな第一声を口にするのでしょうか。今までのラッキーな人たちは、「まさか!」の呆然組が64%、「やった!」の手ばなし組が16%……たどか。いつか、あなたも、夢言葉。

宝くじ

財団法人 **日本宝くじ協会**